

令和

6

年度版

はつとばのまはる

1



愛知教育文化振興会
三河教育研究会

もくじ

I 言葉の単位

一 文法とは 2

二 言葉の単位 3

(一) 文章・談話 3

(二) 段落 4

(三) 文 6

(四) 文節 7

(五) 単語 9

II 文の組み立て

一 文節どうしの関係 13

(一) 主・述の関係 (主語・述語) 14

(二) 修飾・被修飾の関係 (修飾語) 16

(三) 接続の関係 (接続語) 18

(四) 独立の関係 (独立語) 19

二 連文節 22

(一) 並立の関係 23

(二) 補助の関係 24

三 文の組み立て 25

III 単語の種類

一 単語の種類 30

(一) 自立語と付属語 30

(二) 活用の有無 32

二 品詞 33

三 体言と用言 36

IV 文語のきまり

一 文語と口語の違い 40

二 文語の特徴 42

三 歴史的仮名遣い 43

「ことばのきまり」の特色と使い方

「ことばのきまり」は、授業や教科書に合わせて、自主的に学習を進めることができるように編集してあります。この本のしくみと使い方を説明しますので、よく読んで学習を進めていきましょう。

一 この本のしくみ

「ことばのきまり」は、およそ次のように構成されています。

(一) 例を示して説明するところ

・ 例文を示して説明します。

・ 必要に応じて、詳しく説明します。

(二) 学習を確かめよう

・ 解説を受けて、基本的な問題を解きます。

(三) 練習問題に取り組もう

① 基本問題をさらに解き、学習の定着を図ります。

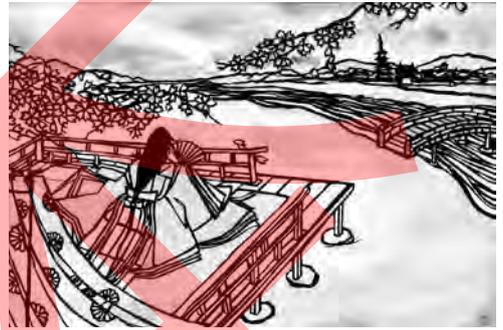
② 基本問題よりやや難しい発展問題を解きます。

※この構成は、学年や単元によって異なりますが、基本的な学習を終えて練習問題に進むことになっています。

二 登場人物のアドバイス

「ことばのきまり」には、次の二人の人物が登場します。それぞれのアドバイスをしたがって、自主的に学習を進めましょう。





『ことばのきまりⅠ』を学ぶにあたって

— 確かな言葉の使い手になろう —

私たちの生活に、言葉は不可欠です。普段何気なく使っている言葉ですが、文法について理解することでわかりやすく思いを伝えることができます。それは、よりよい人間関係を育むことにつながります。『ことばのきまりⅠ』では、主に次の四つの学習をします。

Iでは、言葉のまとまりを考える学習をします。

言葉は、意味や発音により、いくつかのまとまりに分けること

ができます。これら「言葉の単位」には、「文章・談話」「段落」

「文」「文節」「単語」があります。「文章・談話」の中を見ていくと、書き手が文章の内容のまとまりごとに区切った「段落」を見つけることができます。このような言葉のまとまりを意識することで、的確に文章を書いたり、読んだりすることができます。

IIでは、言葉と言葉の関係を考える学習をします。

「文節どうしの関係」「連文節」「文の組み立て」の学習を通して、複雑な文も、文の成分の組み合わせによって組み立てられ、関係し合っていることを確認することができます。

IIIでは、単語の分類について考える学習をします。

単語は、「単独で文節を作ることができるかどうか」「形はどのように変化するのか」「文の中でどのような成分になるのか」といった性質の違いによって分類ができます。

IVでは、古い時代の言葉である「文語」と、現代の言葉である「口語」について学習します。言葉は、時代や文化とともに変化します。文語の決まりを知ること、優れた古典の世界に触れることができるでしょう。

言葉を使うなかで自然と身につけてきた文法ですが、改めてその決まりを整理することで、みなさんが、より確かな言葉の使い手となっていくことを願っています。

I 言葉の単位

一 文法とは

私たちは、互いに自分の考えや気持ちを伝え合うため、または、事実を知らせるために言葉を使います。
そして、言葉を使うときには、その意味だけでなく、組み立て方、使い方の決まりをふまえて使っています。このような言葉に関する決まりを**文法**といいます。

おおまかに分けると、文法には次のようなものがあります。

- ① 言葉の区切り方
 - 私は一文を一書く。
 - × 私は作文を一書く。
- ② 言葉を並べる順序
 - 私は 作文 を 書く。
 - × 書く は 作文 私 を。
- ③ 言葉の形の変化
 - 私は 作文を 書いた。
 - × 私は 作文を 書た。

よりわかりやすく正確に伝え合うために、文法を学んでいきましょう。

学習のねらい

- ◇ 文章や段落は、どのようなものか学ぶ。
- ◇ 文とは、どのような単位をいうのか学ぶ。
- ◇ 文節と単語とは、それぞれどのようなまとまりのことをいうのか学ぶ。

学習を確かめよう

言葉を並べる順序や、言葉の形が不自然なところを見つけ、正しく書き換えなさい。

- (1) 笑うが 彼女。
- (2) 本は この おもしろい。
- (3) この 唐辛子は 辛く。
- (4) 花が きれい 咲く。
- (5) 彼は 昨日 走るた。
- (6) 私は まったく 気に しません。

二 言葉の単位

(一) 文章・談話

① 文章

みなさんが作文を書こうとする場合について考えてみましょう。まず、「何について書こうかな。」と考えますね。次に、書く内容が決まったら、述べたいことを一文一文に書き表します。そして、自分の思いや気持ちを読む人に正しく伝わるように、作品を仕上げていきます。

文章とは

ある意図（読み手にぜひ感じてもらいたい思い・気持ち・訴え）のもとに書かれたものを**文章**といいます。また、音声によって表したときは、それを**談話**といいます。まとめてみると、**文章**とは、次のようなものと考えられます。

- ① 書き手の思い・気持ち・訴えが述べられている。
- ② いくつもの文が続いている。
- ③ 全体として一まとまりの内容をもっている。

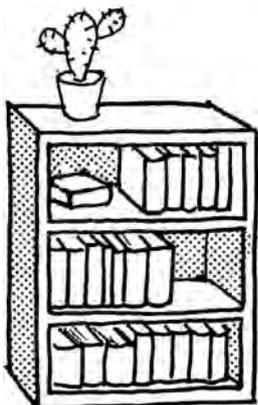
ですから、いくらたくさんさんの文が並んでいても、これらの条件を全て満たしていないものは、**文章**とはいえないのです。

講演や講義のように話されたものは、一つの**談話**ということができます。

② 文章の種類

文章は、次の表のように、大きく二つに分類されます。

項目	文章
種類（ジャンル）	観察・記録・報告・説明・論説 など
中心となる内容	要旨
書き手	筆者など
項目	文学的文章
種類（ジャンル）	詩歌・随筆・物語・小説・脚本 など
中心となる内容	主題
書き手	作者など



(二) 段落

① 段落

- ① その疑問に答えるために、ダイコンの芽であるカイワレダイコンを見ながら考えてみます。カイワレダイコンは、双葉と根、その間に伸びた胚軸とよばれる茎から成り立っています。根の部分には、種から長く伸びた主根と、主根から生えている細いひげのような側根があります。
- ② これに対して、私たちが食べるダイコンをよく見てみると、下のほうに細かい側根が付いていたり、側根の付いていた跡に穴が空いているのです。いっぽう、ダイコンの下のほうは主根が太ってできてすべすべしています。この上の部分は、根ではなく胚軸が太ったものです。つまり、ダイコンの白い部分は、根と胚軸の二つの器官から成っているのです。
- ③ この二つの器官は、じつは味も違ってきます。なぜ、違っていているのでしょうか。
- ④ 胚軸の部分は水分が多く、甘みがあるのが特徴です。胚軸は、地下の根で吸収した水分を地上の葉などに送り、葉で作られた糖分などの栄養分を根に送る役割をしているからです。
- ⑤ いっぽう、根の部分は辛いのが特徴です。ダイコンは下にいくほど辛みが増していきます。ダイコンのいちばん上の部分と、いちばん下の部分を比較すると、下のほうが十倍も辛み成分が多いのです。ここには、植物の知恵ともいえる理由がかくされています。

(稲垣栄洋「ダイコンは大きな根?」)

段落とは

この文章の①～⑤のように、文章は、書き手の意図をより明確に伝えるために、いくつかに区切って書かれています。そのまとまった意味をもつ一つ一つの段落(形式段落)といます。段落の初めは改行して、一字下げます。

② 段落のまとめ

いくつかの形式段落が集まって、大きなまとまり(意味段落)を作る場合があります。文章は、普通いくつかの段落が集まって、大きなまとまり(意味段落)となり、それらが、さらにいくつか集まって組み立てられています。各段落の要点をまとめてみるとわかります。

例えば、上の文章の①～⑤段落の要点をまとめると、次のようになります。()にあてはまる語句を上文中から抜き出しながら、まとまりを考えましょう。

- ① カイワレダイコンは双葉と()、()から成り立っている。
- ② ダイコンの白い部分は二つの()から成っている。
- ③ なぜ器官が違うと()も違うのか。
- ④ ()の特徴。
- ⑤ ()の特徴。

この五つの段落は、内容から考えると大きく二つのまとまりに分けることができます。つまり「器官の違い」について書いている①・②と、「器官の違いによる味の違い」について書いている③・④・⑤の二つに大きくまとめられるのです。

- ① 内容から考えてまとめた大きなまとまりのことを、**意味段落**とすることがあります。
- ② 大きなまとまりは、それぞれ働き(問題提起・答え/序論・本論・結論など)を果たしています。
- ③ 大きなまとまりに着目して文章を読むと、文章全体の内容や構成がつかみやすくなります。



学習を確かめよう

① 次の文章は、いくつかの形式段落からできていますか。漢数字で書きなさい。

龍だ。体をあずけた棒を頼りに、しなやかに舞い上がり、棒のしなりとともに、足を天に突き刺し、体をぴんと張る。その瞬間、世界中の音も時も止まる。まさに龍が天を駆け上っていくようだ。長坂先輩が、市の総合体育大会で棒高跳びのバーを跳び越える姿を初めて見た僕は、体中に電気が走るのを感じた。

長坂先輩は、先生や父兄に、きちんとあいさつをする。荷物や靴が乱れていたなら、だれのものでも関係なくきちんと整頓する。自分の運動神経の良さうぬぼれず、真面目で自分に厳しい。とてもかなわない。先輩は僕の中でスーパーヒーローとなった。

八月三日、先輩たち三年生にとって最後の大会だ。この日はかりは、自己新記録三メートル二十をどうしても跳んでもらいたい。僕は、もう祈るしかなかった。

大会当日、補助員になった僕は、係の子が持ってきた記録用紙を別の紙に写したり、掲示板を持っていったりと、大忙しだった。仕事中、僕は何度も時計を見た。そのたびに二階の会議室から外を見る。落ち着かない僕の心の中にざわめきが走る。思い切って外に出た。

見えた。ハードル走の向こうの、走り幅跳びの向こう。走り高跳びのさらに向こう。大歓声の中、遠くに僕はまた、龍を見た。台風の風とともに堂々と舞い上がっていく。跳んだ。うれしさのあまり、僕は飛び上がった。

(生徒作品)

形式段落の数 ()

② 次のそれぞれの文章を三つの段落に分けて、第二段落、第三段落の初めの三字を書きなさい。

① 現在、地球温暖化が深刻な問題となっています。十八世紀後半ごろからのめざましい産業の発展に伴い、石炭や石油が大量に消費されるようになりました。その結果、大気中の二酸化炭素の量が増え、このままいくと二十一世紀末の地球の平均気温は、現在より二度上がるといわれています。この先、地球温暖化を食い止めるためには、私たち一人一人が環境に配慮するような生活をするのが大切です。 unnecessary物は買わない、物を大事に使うなど「もったいない」の精神が私たちの地球を救うことにつながるのです。

(編集委員による書き下ろし)

第二段落 ()

第三段落 ()

② 辺りがすっかりやみに飲み込まれたころ、ほのかに光るあたりがあらちらこちらでゆれていた。「蛍だ。」僕は思わず叫んだ。あれは二年前のことだ。久しぶりに故郷を訪れた僕は、かつての遊び場だった宇奈川が、あまりにもみじめに汚れているのにショックを受けた。宇奈川が泣いている。僕はそう感じた。それから数日後、僕は決意を胸に宇奈川の前に立った。ある作戦を思いついたのだ。この川の復活をかけた大プロジェクトを。

(編集委員による書き下ろし)

第二段落 ()

第三段落 ()

(三) 文

私たちは、次の a、b、c のように言葉を使います。

- a 出来事や事柄を相手に伝えたり、尋ねたりします。
 - ・長野のおばさんが遊びに来るそうです。
 - ・あなたはどんな本を読みましたか。
- b 自分の気持ちや意志を伝えます。
 - ・あの時のあなたの親切がうれしかった。
 - ・青森まで行ったら、十和田湖まで足をのばしたい。
- c 相手に誘いかけたり、命令したりします。
 - ・学校まで一緒に行こうよ。
 - ・図書館で調べなさい。

文とは

いろいろな出来事や事柄を、伝えたり、尋ねたり、行動を誘いかけたりする言葉のまとまりを、**文**といいます。
文の区切りは、文字で書く場合は「。」(句点)で示するのが普通です。
話すときは、そこで息を切って、少し休むことで表します。

学習を確かめよう

① 次のうち、文と呼べないものはどれですか。記号で答えなさい。

- ア 国語の授業は楽しい。
- イ おはよう。
- ウ 夏に学校へ音楽で生徒です。
- エ 春が来て、中学校の生徒になった。

言葉が連続しているだけでは「文」とはいえません。日本語の言葉の決まりにしたがって、書き手、または話し手の意志や伝えたいことが表現されていなければ「文」といえないのです。



② 次の文の切れ目となるところに、例にならって句点(。)を付けなさい。

例 山田さんが留守をしていたすると大原さんが来た。

試験が始まった問題用紙を見たら、頭の中が真っ白になったんだ。これはこんな問題は見ることがないそうだったのだ僕は、テスト範囲を間違えていたのだしかし、今さらあがいても仕方がない僕は、覚悟を決めて鉛筆を強く握りしめた

(編集委員による書き下ろし)

(四) 文節

あの子どもは今日もここへ来た。

右の文を、声に出して読んでみましょう。短い文ですから、一息で読むことができます。

この文を、意味を壊さず、不自然にならないように、できるだけ多くの部分に区切って読んでみましょう。口に出して、意味がわかるように区切って読むと、次のようになります。

あの 子どもは 今日も ここへ 来た。

文節とは

発音や意味のうえで不自然にならないように、文をできるだけ短く区切ったまとまりを**文節**といいます。

このように考えると、文は全て一つ以上の文節からできています。ですから、文節は文を組み立てる単位であるといえます。

文節の区切りを見つけるためには、次のように「ね」「さ」などを
入れてみるといいでしょう。

あの 子どもは 今日も ここへ 来た。



次の二つの文を文節に区切ってみましょう。

- a 赤い花がきれいに咲く。
- b 赤い夕日が西の山に沈みます。

aは、「赤い 花が きれいに 咲く。」と区切ることができます。
bは、「赤い 夕日が 西の 山に 沈みます。」と区切ることができます。

bの文の「沈みます」の部分を「沈み—ます」とするのは誤りです。「ます」はそれだけでは使わない言葉です。だから、「沈み」と「ます」を切り離すと、不自然です。
その言葉だけで意味のわかる言葉か、それだけで使わない言葉か、考えて判断しましょう。



学習を確かめよう 

① 次の文の文節の区切り方で、正しいものを選んで記号で答えなさい。

(1) 私は急いで家に帰った。

ア 私は 急いで 家に帰った。

イ 私は 急いで 家に 帰った。

ウ 私は 急いで 家に 帰った。

(2) あの空き地はもうなくなるといいう。

ア あの 空き地は もう なくなると いう。

イ あの 空き地は もうなくなると いう。

ウ あの空き地は もう なくなると いう。

(3) そんなことで練習を休ませてはくれなかった。

ア そんなことで 練習を 休ませては くれなかった。

イ そんな ことで 練習を 休ませては くれな かった。

ウ そんな ことで 練習を 休ませては くれなかった。

(4) このことは何も彼にかぎったことではない。

ア この ことは 何も 彼に かぎった ことでは ない。

イ この ことは 何も 彼に かぎった ことではない。

ウ このことは 何も 彼に かぎった ことではない。

② 次の文を例にならって、下の()に示してある数の文節に区切りなさい。

例 花が ——— きれいに ——— 咲く。 (3)

(1) 白い霧が一面に広がります。 (4)

(2) 本番中におなかが痛くなる。 (4)

(3) 大雨になって中止になる。 (4)

(4) さまざまな音色が聞こえてきます。 (4)

(5) 私の紙飛行機は、明るい太陽の光を受けて飛び続けた。 (7)

(6) 大きなビルの角を曲がって消えた。 (5)

(7) あの子はもどってきて、あとをつぐでしょう。 (6)

(8) いつも泣かないで一人で静かに遊んでいました。 (6)



多くの場合、「て」「で」の後で文節は切れます。(詳しくは24ページ参照)
走っている。 読んでみる。

(五) 単語

① 単語

冷たい 水が 谷を 流れる。

右の例文は、四つの文節からできています。これを、さらに細かく分けてみましょう。

冷たい 水が 谷を 流れる。

となりますね。

単語とは

文節をさらに細かく分け、それ以上分けると言葉としての意味がなくなるか、言葉としての役割を果たさなくなるところまで区切った言葉の最小単位を、**単語**といいます。

単語にはいくつかの種類があります。例文の単語を使って分けてみましょう。

- ① 「水・谷」……………ものの名前を表す単語。
- ② 「冷たい・流れる」…動作(変化)や様子を表す単語。
- ③ 「が・を」……………別の単語の下に付いて、文節を作る単語。

「が」「を」も重要な働きをしている単語です。



〔単語の区切り方〕

次の文を単語に区切ってみましょう。

私も明日の試合に出る。

- ① まず、文節に区切る。

私も ね 明日の ね 試合に ね 出る ね。

- ② 各文節の中で、それだけで意味のわかる単語を抜き出す。

私も 明日の 試合に 出る。

「私」「明日」「試合」「出る」

- ③ それ以外の単語を確認する。(上にくる単語に付いて文節を作るもの)

私も 明日の 試合に 出る。

「も」「の」「に」

- ④ 全部抜き出したか確認する。

「私」「も」「明日」「の」「試合」「に」「出る」

② 複合語

二つ以上の単語が結び付き、新たな意味をもつようになったものを複合語といいます。複合語は全体で一つの単語です。一まとまりで一つの意味をもち、アクセントの位置も変わります。

例 春休み・国語係・夏期講習・走り抜く・逃げ出す・長引く



学習を確かめよう 

① 次の文の単語の区切り方で、正しいものを選んで記号で答えなさい。

(1) 種は四月の暖かい日にまく。

ア 種は 四月の 暖かい 日に まく。

イ 種は 四月の 暖かい日 に まく。

ウ 種は 四月の 暖かい日に まく。

(2) 彼はぜいたくなものをもっていた。

ア 彼は ぜいたくな もの を もって いた。

イ 彼は ぜいたくな もの を もって いた。

ウ 彼は ぜいたくな もの を もって いた。

③ 次の単語を、①「もの名前を表す単語」②「動作(変化)や様子を

表す単語」③「別の単語の下に付いて、文節を作る単語」に分けて書き

なさい。

(1) 姉は優しい顔で手を振る。

① ()

② ()

③ ()

(2) 今日から部活動の練習が始まります。

① ()

② ()

③ ()

(3) きれいな夕日を見と見る。

① ()

② ()

③ ()

② 次の文を例にならって、下の()の中に示してある数の単語に区切

りなさい。

例 赤い 夕日が 西の 空に 沈む。

(1) 今年は 暑い 日が 続く。

(2) 彼の 趣味は 読書だ。

(3) 先生が 何度も 繰り返します。

(4) みんなは 港で 船を 待った。

(5) 休日は 家で 漫画を 読んだ。

(8)

(6)

(6)

(6)

(8)

(8)



単語の区切り方
詳しい説明

練習問題に取り組もう 

基本問題

① 次の文章は、句点（。）を付けて文に区切ると、いくつの文からできていますか。漢数字で書きなさい。

私は、人間はできるだけ自動車や電気製品を使わない暮らしをすべきだと考えますエネルギーや資源をこのまま使い続けると、汚染が進み、資源もなくなってしまう全くと使わないのは無理だと思えますが、多少不便になっても、できるだけ自然に近い生活にもどるほうがよいと思います
(編集委員による書き下ろし)

文の数 ()

② 次の文を例にならって () に示してある数の文節に区切りなさい。

例 僕は一水を一飲んだ。

(3)

(1) 私は木の枝をゆすりました。

(4)

(2) 今度は逆に、彼の動きに注目してみる。

(6)

(3) 前に住んでいたところのことは忘れてしまったなあ。

(7)

③ 次のそれぞれの文は、一で文節を区切ってありますが、区切られていないところが一か所あります。例のように一を付け加えて正しく区切りなさい。

例 こんな一ことは一初めてだ。

(1) 友子は一指を折って一数えた。

(2) あのころの一ことを一忘れない。

(3) 私は一あんなに一険しい顔を一見た一ことは一ありませんでした。

(4) まるで一夢のような話だ。

(5) 私には一困ったとき一友達に一救われた一経験が一あります。

(6) 森を一渡る一風に一春の訪れを一感じるので一あった。

(7) 小鳥が一飛んできて一木の一枝に一とまる。

④ 次の文を例にならって () に示してある数の単語に区切りなさい。

例 夕|日|が|西|の|海|に|沈|み|ま|す。

(8)

(1) 今日|は|と|と|も|の|ど|か|な|よ|い|天|気|で|す。

(7)

(2) 教室|から|大|き|な|声|が|す|る|と|驚|く。

(8)

(3) 雨|の|日|は|読|書|を|す|る|人|が|多|い。

(10)

① 次のそれぞれの文を、筋の通ったまとまりのある文章にするにはどう並べたらよいですか。その順番を()に数字で書きなさい。

- (1) ある日の夕方、行列のできているラーメン店の前を通った。
- () すると、目の前にとんでもない量の一杯が差し出された。
- () 店に入って、券売機でラーメン大盛りのチケットを購入した。
- () ちようどお腹もすいていたので、その店で夕食をとることにした。
- () やはり、初めて訪れる店のときには、事前にリサーチしておくべきである。
- () 大半を食べきれずに、残すことになってしまった。

② 次の文章中の——線①と②の部分で文節に分けるといくつに分けられますか。また、——線③と④を単語に分けるといくつに分けられますか。それらの数を、漢数字で書きなさい。

① シジユウカラは、春のおとずれとともに繁殖期をむかえます。木のうろなどにこけを運んで巣を作り、毎朝一つずつ、合計六個から十三個ほどの卵を産みます。ひながかえると、つがいで協力して青虫などの餌を巢に運び、子育てをします。

私は二〇〇五年から毎年、長野県軽井沢町かろいざわまちのとある森に巣箱を掛けて、繁殖したシジユウカラの様子を観察してきました。二〇〇八年六月のある日、研究の転機がおとずれました。

(鈴木俊貴「言葉」をもつ鳥、シジユウカラ)

- ① (文節の数:)
- ② (文節の数:)
- ③ (単語の数:)
- ④ (単語の数:)

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

実験開始から五分後、三つの紙コップに入っている水の温度を計ってみた。どれも六十度を超えていた。

十分後には、紙コップに水を四分の一入れたものと半分入れたものが沸騰した。このとき、水を全部入れたものの温度は八十六度だった。(①)水が少ないものの方が早く沸騰し、そのために紙コップが燃えてしまうということはなかった。十五分たった。水を全部入れたものはまだ沸騰しなかった。(②)温度は九十一度に達しており、もう無理かなと思った。(③)温度計の赤いところが上に動いた温度が上がったのだ。(④)まだ、温度が上がるのなら、という気持ちで、沸騰するまで待つ気になった。

(生徒作品)

(1) この文章には、形式段落を分けなければならないところが一か所あります。その場所の初めの三字を書きなさい。 ()

(2) この文章には、句点(。)を付けなければならないところが一か所あります。例のように文章中に書き込みなさい。

例 私は、本を読んだその本はとてもおもしろかった。

(3) この文章では、次の文が抜けています。この文が入る場所として最も適切な場所を(①)～(④)の中から見つけ、番号で答えなさい。

火を消そうとしたそのときだった。 ()



文節・単語
練習問題

Ⅱ 文の組み立て

一 文節どうしの関係

赤い 夕日が 西の 海に 沈みます。

右の文は、五つの文節からできています。それぞれの文節は、多くの場合、文の中で、ある文節と深いつながりをもっています。

a 夕日が——沈みます

「何が」「どうする」という関係になっています。

b 赤い——夕日が

「赤い」が「夕日」の色を詳しく説明しています。

c 西の——海に

「西の」が「海」の方角を詳しく説明しています。

d 海に——沈みます

「海に」が「沈みます」の場所を詳しく説明しています。

文節どうしの関係とは

aの「何が」「どうする」のような関係を(一)主・述の関係、b・c・dのように、ある文節が他の文節を詳しく説明しているものを(二)修飾・被修飾の関係といい、この他にも(三)接続の関係、(四)独立の関係があります。このような四つの関係を文節どうしの関係といいます。また、文を組み立てる部分となるとき、文節が果たす役割を、**文の成分**といいます。

学習のねらい

- ◇ 文節どうしの関係には、どのようなものがあるか学ぶ。
- ◇ 文はどのような成分で組み立てられているか学ぶ。

学習を確かめよう

次の——線の文節に係る文節はどれですか。例にならって「」を書きなさい。

例 車の窓を少し開けた。

文節どうしが結び付くとき、前にある文節は、後の文節に係るといい、後にくる文節は、前の文節を受けるといいます。

(1) 僕は階段を下りた。

(2) 涼しい風が庭から吹いた。

(3) 僕はよく川へ遊びに出かけました。

(4) 僕の父は会社へ小さな車で通勤している。

(5) その猫は突然公園に走り始めた。



(一) 主・述の関係 (主語・述語)

- a 犬が 走る。
- b 花が 美しい。
- c あれが 中学校だ。
- d 本が ある。

右の四つの文は、

四つの基本文型がありますね。



- a 「何が (犬が) どうする (走る)」
- b 「何が (花が) どんなだ (美しい)」
- c 「何が (あれが) 何だ (中学校だ)」
- d 「何が (本が) ある・いる、ない (ある)」

という組み立てになっています。
みなさんが、日常生活で読んだり、書いたり、話したりする文はもっと複雑な形をしていることが多いのですが、大きく分類すれば、文はこの四つの基本的な型に分けられます。

主・述の関係とは

文の中で、「何が」「誰が」に当たる文節を**主語**といい、「どうする」「どんなだ」「何だ」「ある・いる」「ない」に当たる文節を**述語**といいます。そして、この二つの文節の関係を、**主・述の関係**といいます。

- したがって、a～dの各文の主語・述語は次のようになります。
- a 犬が 走る。
主語 述語
 - b 花が 美しい。
主語 述語
 - c あれが 中学校だ。
主語 述語
 - d 本が ある。
主語 述語

主語は「ーが」のほかいろいろな形をとります。主語には、「が、は、も」が付くと覚えておくくと便利です。

- ・山が 美しい。 ・山は 美しい。 ・山も 美しい。
- また、次のように、「が、は、も」にかわり、主語を強めるなど、主語にはほかの意味をそえる言葉が付くこともあります。
- ・山こそ 美しい。 ・山だって 美しい。 ・山さえ 美しい。

主語の省略、主語と述語の倒置とは

日本語では、どの文にも主語があるとは限りません。**主語の省略**された文もよく見かけます。また、主語と述語の順序が入れ替わった文もあります。これを、**倒置**といいます。

①主語の省略

僕の猫の名前は、タマといいます。(タマは)僕が幼稚園のときに生まれました。
「生まれました」の述語に対して主語を考えると、生まれたのはタマですから、主語は「僕が」ではなく、「タマは」になります。

②主語・述語の倒置

元気だね、君は。 なんだらう、この不気味な音は。

体言と用言 (詳しくは36ページ)

体言 主語になることができる**単語**
用言 それだけで述語となることができる**単語**

例 犬が 走る。 美しい。 静かだ。

学習を確かめよう 

① 次の文はどんな組み立てになっていますか。あとの□から選んで、記号で答えなさい。(—線が主語・—線が述語)

- (1) 僕はきのう父とつりに出かけた。
- (2) 白い雲がある。
- (3) 青空がたいへんきれいだ。
- (4) これはヒマワリの花だ。
- (5) 「まあ」と母は驚いて、私を見ました。

ア	何が(は)	—	どうする	イ	何が(は)	—	どんなだ
ウ	何が(は)	—	何だ	エ	何が(は)	—	ある・いる、ない

② 次の文の文節どうしの関係が、主・述の関係になっているものに○、そうでないものに×を書きなさい。

- (1) 友が いる。
- (2) たくさんの 花だ。
- (3) 太陽は 昇る。

③ 次の文で、主・述の関係を探し、例にならってそれぞれ主語に—線、述語に—線を引きなさい。

例 水銀灯が ともる。

- (1) 母さんが 顔を 出した。
- (2) みんなも 顔を 見合わせて 笑った。
- (3) あちらこちらに 花びらが 浮かぶ。
- (4) 私は ブランコを ゆすりました。
- (5) 明け方の 空気は ひんやりと 冷たい。
- (6) 君こそ 英雄の 名に ふさわしい。
- (7) ハアと、誰かが ため息を つきました。
- (8) おいしい、この ケーキは。

④ 次の文の体言には—線を、用言には—線を引きなさい。

- (1) 空は 広く 青い。
- (2) 会場が 明るく なる。
- (3) 教室に 黒板が ない。



まず、述語を探しましょう。述語はほとんど句点(。)のすぐ上の文節にあります。次に、主語を探しましょう。主語は「何が」「誰が」に当たる文節です。

(二) 修飾・被修飾の関係 (修飾語)

次の文に、さらに詳しく述べる言葉を付け加えてみましょう。

花が 咲いた。

(どんな花が?) () () () ()
 (どのくらい咲いた?) 花が () () () ()
 (どこに咲いた?) 花が () () () ()
 () () () ()
 () () () ()
 () () () ()
 () () () ()

例えば、前の文でそれぞれ(美しい)(たぐさん)(庭に)を入れたとしましょう。全てつなげてみると、こんな文になります。

(美しい) 花が (たぐさん) (庭に) 咲いた。

「花が」と「咲いた」の関係は主・述の関係です。「美しい」の文節は「花が」を、「たぐさん」「庭に」の文節は「咲いた」を、それぞれ詳しく説明しています。

修飾・被修飾の関係とは

一つの文節が後の文節に係って、その意味内容を詳しくする関係を修飾・被修飾の関係といいます。係る文節を修飾語、受ける文節を被修飾語といいます。

例文の場合は、次のようになります。

【修飾語】

・美しい → 花が

・たぐさん → 咲いた

・庭に → 咲いた

【被修飾語】

次の文の修飾・被修飾の関係を考えてみましょう。

小さい きつねが うらの 山に たぐさん います。



修飾・被修飾の関係は、次のように四つあります。

- ① 小さい → きつねが
- ② うらの → 山に
- ③ 山に → います
- ④ たぐさん → います

連用修飾語・連体修飾語

修飾語は修飾する文節によって、二種類に分かれます。

連用修飾語 用言を含む文節を修飾する文節。

連体修飾語 体言を含む文節を修飾する文節。

次の各文の...線の修飾語は次のように分類されます。

(例)

小説を 読む。(何を ↓ どうする)

明日 出発する。(いつ ↓ どうする)

公園で 遊ぶ。(どこで ↓ どうする)

ゆつくり 歩く。(どのように ↓ どうする)

とても 難しい。(どのくらい ↓ どのんだ)

私の 家族。(誰の ↓ 何)

数学の 教科書。(何の ↓ 何)

連体修飾語

連用修飾語

学習を確かめよう 

① 次の文の~~~~線が修飾している文節を見つけて、例にならって、
——線を引きなさい。

例 美しい花が満開です。

- (1) 私は顔を上げました。
- (2) 祖母の顔はとてもおだやかだった。
- (3) 母さんが一度だけつぶやいた。
- (4) 僕の父は戦争に行っていていました。
- (5) 一階まで下りて庭に出た。
- (6) 僕はまじまじと父を見つめた。
- (7) やがて汽車が動きだした。
- (8) 静かな部屋で本を読む。
- (9) 兄弟そろって母の上に顔を寄せる。



多くの場合、受ける文節は、係る文節より後にきます。

② 次の——線の文節に係る修飾語全てに、例にならって、~~~~線を引きなさい。

例 車はゆつくりと走りだした。

- (1) 大きな手でボールをつかむ。
 - (2) この部屋はとても明るい。
 - (3) 私はすぐに家に帰る。
 - (4) 真っ先に私が笑った。
 - (5) 私はドアをそっと閉めた。
 - (6) 青空にきらきらと機体が輝く。
 - (7) 一人のたくましい若者が山頂にいた。
- ③ 次の文の~~~~線が連用修飾語であれば「用」、連体修飾語であれば「体」を（ ）に書きなさい。

- (1) 石がころころと転がる。 ()
- (2) 美しい風景が広がっている。 ()
- (3) 今できることは今しよう。 ()

修飾語は一つとは限りません。見つけるときは、主述の関係と区別して考えましょう。



(三) 接続の関係 (接続語)

- a 美しかった。それで、いつまでも見とれていた。
- b 美しいので、彼の撮った写真に見とれた。
- c 訪ねたが、今日も老人は留守だった。

aの「それで」は、前の文と後の文をつなぐ役割をもつ文節になっています。

bの「美しいので」や、cの「訪ねたが」は、下の文全体に係って理由や条件を表す文節になっています。

接続の関係とは

文と文、文節と文節をつなぐ働きをもつ文節を、**接続語**といいます。また、接続語がつなぐ文と文との関係、理由や条件などを示す接続語と後に続く文節との関係を、**接続の関係**といいます。

〈前後の文の関係を表す〉

- ・ 楽しかった。だから、また遊びたい。 (理由)
- ・ よい映画だ。しかし、ヒットしないだろう。 (逆接)

〈後の文節に対する理由や条件を表す〉

- ・ 眠かったので、休んでしまった。 (理由)
- ・ 寒ければ、コートを着なさい。 (条件)

学習を確かめよう

① 次の文の接続語に……線を引きなさい。

- (1) 安いので、あと 四つ ください。
- (2) 一生懸命 やった。けれども、うまく できない。
- (3) できるのに、彼は 遠慮して いる。

- (4) 窓を 開けた。すると、山が 見えた。

- (5) その 提案は 魅力的だ。しかし、僕は 断る。

② 次の文の接続語に……線を引きなさい。また、その語が、a「前後の文の関係を表す」のか、b「後の文節に対する理由や条件を表す」のか、記号で答えなさい。

- 例 雪が降った。だから、今日は行かない。 (a)

- (1) 私は、努力をした。しかし、駄目だった。 ()

- (2) さびしかったので、友達にメールをした。 ()

- (3) 怖ければ、このテレビを見ないほうがいいよ。 ()

(四) 独立の関係 (独立語)

独立の関係とは

これまでに習った文節どうしとの関係は、必ず他の部分と関係をもっていました。しかし、中には、中には、他の文節と直接関係がなく、独立している文節があります。その文節を、**独立語**といいます。また、**独立語**と、それ以外の文節との関係を、**独立の関係**といいます。

次の……線の部分が独立語です。

a	まあ、なんてきれいなんでしょう。	(感動)
b	はい、承知しました。	(応答)
c	八月十一日、この日は「山の日」です。	(提示)
d	先生、この問題がよくわかりません。	(呼びかけ)
e	こんにちは、お元気ですか。	(挨拶)

学習を確かめよう

次の文の独立語に……線を引きなさい。
また、それが表すものをあとの□から選んで、() に記号で答えなさい。

(1) おはようございます、いい 日になりましたね。 ()

(2) おや、もう 花が 咲いたよ。 ()

(3) いいえ、僕は そんな ことは して いません。 ()

(4) みなさん、すぐに 集まって ください。 ()

(5) 笑顔、それが 君の 長所だ。 ()

(6) 裏切り、これほど いやな ものは ない。 ()

(7) ああ、なんと 美しい 友情だろうか。 ()

ア	感動	イ	応答	ウ	提示
エ	呼びかけ	オ	挨拶		



独立語はほとんど文の初めにあり、「、(読点)」で区切られています。

基本問題

① 次の文の接続語に……線を引きなさい。

- (1) 冬が来た。しかし、寒くはなかった。
- (2) 低いから、周りがよく見えない。
- (3) 真っ暗だったので、恐ろしかった。
- (4) 真っ暗だった。だから、恐ろしかった。
- (5) 暖かければ、私も行きます。
- (6) 見ると、まだ外は暗かった。
- (7) 絵の具がよいか。あるいは、ペンがよいか。
- (8) 暗かったから、走ってきた。
- (9) 風邪をひいた。そこで、薬を飲んだ。
- (10) 明るいから、新聞がよく読める。



② 次の文の独立語に……線を引きなさい。

- (1) お母さん、早く出かけようよ。
- (2) うん、当たるとうれしいな。
- (3) おや、いつからここにいたの。
- (4) 明日、それは僕の運命を決める大切な日だ。
- (5) もしもし、田中さんのお宅ですか。
- (6) 君たち、学校に何を持ってきているの。
- (7) 携帯電話、そんなものは必要ない。
- (8) はい、そのとおりです。
- (9) さあ、元気に始めよう。
- (10) 四月一日、この日は弟の誕生日だ。



① 次の文で、主語・述語を探し、例にならって、主語に——線、述語に——線を引きなさい。

まずは、述語から探しましょう。
それから主語を見つけてみましょう。



例 美しいちようがが花から花へと飛ぶ。

- (1) 今日も少年は動物園の辺りを歩き回った。
- (2) このノートも貴重な資料です。
- (3) 彼こそ勇者の中の勇者だ。
- (4) 誰だって美しい夢を思い浮かべる。
- (5) きつと、このパンもおいしいだろう。
- (6) 一匹の子犬、それが弟の大切な宝物でした。
- (7) 富士山も、日本で有名な観光地の一つだ。
- (8) 雨だけでなく、風さえ一段と強まった。

② 次の——線の文節を修飾する全ての文節に~~~~線を引きなさい。

- (1) 祖母はゆっくりといすに座った。
- (2) 私たちは少しいたずらを試みた。
- (3) すぐに僕は箱を彼に渡した。
- (4) 林の中に紅葉した大きな木があります。
- (5) 朝から通学者で大きなバスもたいへん混む。

③ 次の(1)~(4)の「」線の文節どうしの関係は何の関係ですか。あとの□の中から選んで、記号で答えなさい。

- (1) 暑かったので、着なかった。 ()
- (2) いいえ、わかりません。 ()
- (3) 竹馬の友という言葉がある。 ()
- (4) 彼は、すてきな人だ。 ()

ア	主・述の関係	イ	修飾・被修飾の関係
ウ	接続の関係	エ	独立の関係

二 連文節

学習を確かめよう

次の——線部の文の成分は何ですか。あとの□から選んで、記号で答えなさい。

- (1) 彼は 素直で 明るい。
- (2) 私は 鳥を 大きな かごに 入れた。
- (3) 妹の 育てた ひまわりが 咲いた。
- (4) 三班の 人、手を 挙げて ください。
- (5) 雨が やんだので、 体育大会を 行った。

ア 主部 イ 述部 ウ 修飾部 エ 接続部 オ 独立部

連文節になるのは、次のように結び付きが強い文節どうしの関係の場合です。



- a 主部
白い 花が 咲いた。
- b 述部
白い 花が 咲いて いた。
- c 修飾部
白い 花が 公園の 花壇に 咲いた。
- d 接続部
暖かく なって きたので、 白い 花が 公園の 花壇に 咲いた。
- e 独立部
白い チューリップ、それが 花壇に 咲いて いる 花です。



例文の「白い花が」「咲いていた」「公園の花壇に」「暖かくなってきたので」「白いチューリップ」は、一まとまりで一つの文の成分と考えます。

連文節とは

二つ以上の文節がまとまって、主語・述語・修飾語などと同じ働きをするものを、**連文節**といいます。連文節で成り立っている文の成分は、一文節で成り立っている文の成分とは区別し、その働きによって**主部・述部・修飾部・接続部・独立部**と呼びます。

(1)	主語	雨は	主・述の関係	滝が	修飾部(連文節)	流れ落ちるように	修飾語	降った。	述語
(2)		大きな	修飾・被修飾の関係(連体修飾)	鳥が	修飾部(連文節)	高く	修飾・被修飾の関係(連用修飾)	飛びます。	述語
(3)		数学と	並立の関係	英語を	修飾部(連文節)	今日	修飾語	家で	修飾語
(4)		兄が	主語	本を	修飾語	読んで	補助の関係	いる。	述部(連文節)

※修飾・被修飾の関係で連文節になるのは、多くの場合、修飾語が連体修飾語のときです。

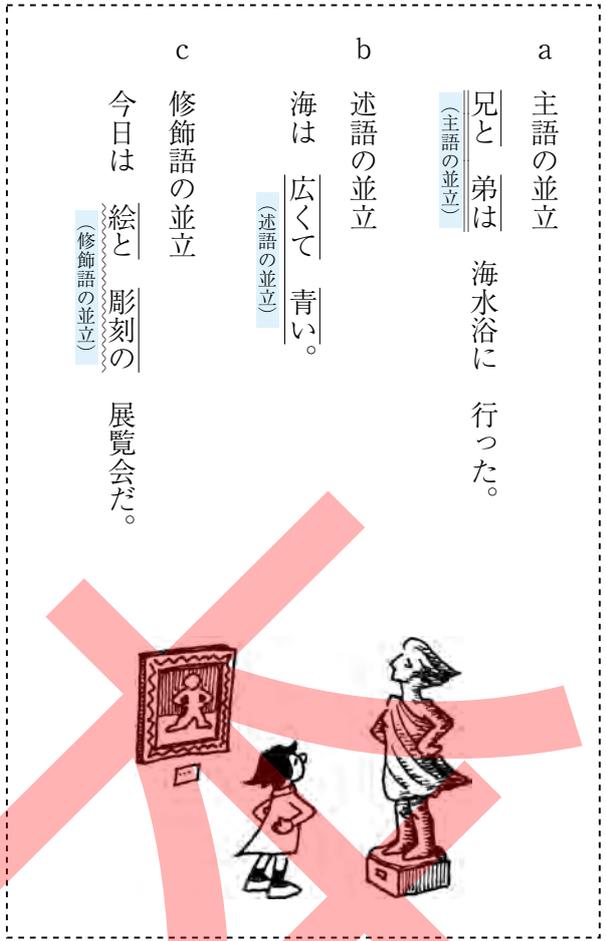
(3) 並立の関係と、(4) 補助の関係は、常に連文節になります。それでは、この二つの関係について学んでいきましょう。

(一) 並立の関係

a 主語の並立
兄と 弟は 海水浴に 行った。
(主語の並立)

b 述語の並立
海は 広くて 青い。
(述語の並立)

c 修飾語の並立
今日は 絵と 彫刻の 展覧会だ。
(修飾語の並立)



aの「兄と」と「弟は」は、ともに「行った」の主語です。bの「広くて」と「青い」は、ともに「海は」の述語です。cの「絵と」と「彫刻の」は、ともに「展覧会だ」に係る修飾語です。

並立の関係とは

二つ以上の文節が対等に並んでいる関係を並立の関係といい、一ままとまりで主語・述語・修飾語と同じ働きをします。

学習を確かめよう

次の文の中で並立の関係にある文節を探し、例にならって、——線を引きなさい。

例 赤い 大きな 花が 咲いた。

- (1) この 町は 静かで 平和だ。
- (2) 君は 勉強も 運動も できる。
- (3) 彼は 私に 親切で 優しくかった。
- (4) にんじんと ピーマンは どうも 苦手だ。
- (5) 実際に 見たり 聞いたり した ことを 書く。
- (6) あそこを 歩いて いくのは 太郎か 次郎だ。
- (7) 道にも 畑にも 父の 姿は ありませんでした。
- (8) 僕の 時計は 時々 進んだり 遅れたり する。
- (9) 海が 荒れて 島も 水平線も カモメも 見る ことが できなかった。



言葉を入れ替えても意味が変わらないものを探しましょう。
また、三文節以上の場合もあります。

(二) 補助の関係

- a 中野君が 運動場を 走って いる。
- b 桜は 美しい 花で ある。
- c 僕は 今 帰る ところだ。
- d 今日は 寒く ない。

aの文の「走って いる」の「いる」は、
父は 部屋に いる。

の「いる」とは違って、存在を表す意味が薄れ、「走る」という動作が続いていることを表しています。いわば、前の文節「走って」を補助する役目をしています。この「いる」は「走って」という文節との結び付きが強く、「走って いる」は、一つの文節のように取り扱うこともできます。
b・c・dの「花で ある」「帰る ところだ」「寒く ない」も、それぞれ一つの文節のように結び付きが強くなっています。

補助の関係とは

下の文節が上の文節の意味を補う文節どうしとの関係を補助の関係といい、補助的に使われる下の文節を補助の文節といいます。

補助の文節は、本来の意味が薄れ、補助的な意味しかないので、普通、平仮名書きにします。

例 見る。
花を 見る。
道を 聞いて みる。(補助)



学習を確かめよう

次の文で補助の関係になっている文節に、例にならって、——線を引きなさい。

例 フカヒレを 食べて みる。

- (1) 雲が たくさん 浮かんで いる。
- (2) 注意点が 赤で 書いて ある。
- (3) 君には もっと がんばって ほしい。
- (4) おじいさんが 新聞を 読んで いらっしゃる。
- (5) 兄が おすすめ くれた 本を 必死に 探した。
- (6) もう すぐ 太平洋が 見えて くる。
- (7) しまつて おいた お菓子を 机の 上に 置く。
- (8) 夏が 終わって しまつと 思うと とても 残念だ。

三 文の組み立て

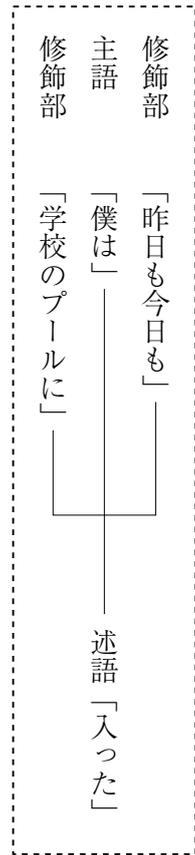
昨日も 今日も 僕は 学校の プールに 入った。

この文は、六つの文節から成り立っています。また「昨日も今日も」「学校のプールに」は、それぞれ連文節となっています。それぞれの部分の働きについて考えてみましょう。

昨日も今日も 僕は 学校のプールに 入った。

「昨日も今日も」「僕は」「学校のプールに」の三つの部分は、いずれも、それぞれ「入った」に係っていきます。

「入った」の文の成分は、述語になりますが、他の部分の文の成分は何になるでしょうか。



このように、複雑な文であっても、文の成分（主・述・修飾・接続・独立）の組み合わせで成り立っているのは同じです。文節がどのように組み立てられ、関係し合っているかを確認することで、よりの確に文の意味や内容を理解することができます。

学習を確かめよう

① 次の文のうち、主語には——線を、述語・述部には——線を引きなさい。

- (1) わあっと 歓声が あがる。
- (2) 私たちは 頂上 めざして 歩いた。
- (3) 小鳥が たくさん 飛んで いく。
- (4) 残念ながら 今月は 絵が 飾られて いなかった。
- (5) 朝から 雨が 滝のように 降り続いて いる。
- (6) ある日 私は 公園へ 行って みた。
- (7) 急に 嵐が 起こった。
- (8) 庭で 子犬が 若者たちと たわむれて いる。

補助の関係は連文節になります。



② 次の文の——線部は、それぞれどんな文の成分になっていますか。あの□から選んで、記号で答えなさい。

(1) 今朝 私は ガラスの コップを 割って しまった。

(2) ついに 水泳記録会の 日が やって きた。

(3) この 地方では 人々は 夏でも 上着を 着ている。

(4) 彼の 学校では 朝から 大きな 歌声が 響いている。

(5) 森林の 土には、 海の 生物を 育てる 大切な 役割が ある。

ア 主語 イ 述語 ウ 修飾語 エ 主部 オ 述部 カ 修飾部

③ 次の文は、それぞれどんな文の成分からできていますか。文の成分を表す記号(線)をあとの□から選んで、その線を引きなさい。

例 兄も 一生懸命 走った。

(1) 彼の 顔は 興奮の ため 赤かった。

(2) 父親は 母親の 顔を じっと 見た。

(3) 駅と 公園は とても 近い。

(4) 白い 鳥が 美しい 湖から 大空へ 飛び立った。

(5) あそこに 彼が くらしていた 家がある。

※ 文の成分を表す記号
主語・主部 || 述語・述部
修飾語・修飾部 ~~~~~



③の詳しい説明

練習問題に取り組もう 

基本問題

① 次の二つの文を、意味を変えないで一つの文にしなさい。

(1) 月が出た。すると、辺りは明るくなった。

()

(2) 話してみた。しかし、理解してくれなかった。

()

(3) 流れが静かだ。だから、怖さはない。

()

② 次の文を、意味を変えないで二つの文にしなさい。

(1) 雨にぬれたから、風邪をひいた。

()

(2) ご飯を食べると、眠くなる。

()

(3) 買い物をしてから、駅に行った。

()

③ 次の文は、それぞれどんな文の成分からできていますか。あとの から選んで、記号で答えなさい。

(1) そして、ボールを また 元の場所に もどした。

() () () () () () () ()

(2) 犬がほえたから、近くの鳥は いっせいに 逃げていく。

() () () () () () () ()

(3) 兄と妹が 居間で いっしょに 勉強している。

() () () () () () () ()

(4) 山田さんと田中さん、ちよつと 来てください。

() () () () () () () ()

(5) 先頭の少年が 叫んだ。「さあ、行こう」。

() () () () () () () ()

(6) その人は、昔、オーケストラの指揮者だった。

() () () () () () () ()

(7) 天気がよかろうと悪かろうと、運動会は 決行されるだろう。

() () () () () () () ()

カ	ア
主部	主語
キ	イ
述部	述語
ク	ウ
修飾部	修飾語
ケ	エ
接続部	接続語
コ	オ
独立部	独立語



3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① わたしは、今年の夏、ボランティア活動に参加しました。それは、初めての、しかも一回きりの体験でしたが、わたしの心に大きな変化をもたらす出来事でした。

仕事は、市の福祉センターで、おむつたたみをすることです。長方形の大きな布でできた老人用のおむつを、台の②上で、決められた形に③いいねいに折って、いくのです。

わたしのしたことは、ほんのわずかなことです。(A)、続けていると、④案外やりがいやよかったと思えることを見い出せるものだと気づきました。この体験は、わたしにとって、⑤貴重なものでした。

わたしは、⑥今後も自分でできるボランティア活動に参加したいと考えています。

(生徒作品)



連文節
練習問題

(1) この文章はいくつの形式段落に分かれていますか。段落の数を漢数字で書きなさい。()

(2) この文章はいくつの文からできていますか。文の数を漢数字で書きなさい。()

(3) 線①「わたしは」に参加しました」はいくつの文節からできていますか。文節の数を漢数字で書きなさい。()

(4) 線②「台の上で」、③「折って、いくのです」の文節どうしの関係を、次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア 主・述の関係 イ 修飾・被修飾の関係 ② ()
ウ 並立の関係 エ 補助の関係 ③ ()

(5) (A)にはどんな接続語が入りますか。次から選んで、記号で答えなさい。()

- ア そして イ また ウ つまり エ でも

(6) 線④「案外」ものだと」、⑤「貴重なものでした」の文の成分を、次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア 主部 イ 述部 ウ 修飾部 ④ ()
エ 独立部 オ 接続部 ⑤ ()

(7) 線⑥「今後も」はどの言葉に係っていますか。係っている言葉を一文節で抜き出して書きなさい。()

Ⅲ 単語の分類

学習のねらい

- ◇ 「単語」にはどのような種類があるか学ぶ。
- ◇ 「品詞」にはそれぞれどのような性質や働きがあるか学ぶ。

一 単語の分類

(一) 自立語と付属語

大きな 桃が 川を 流れる。

右の例文は、四つの文節からできています。これをさらに細かく分けてみましょう。すると、

大きな 桃 が 川 を 流れる。

となります。「大きな」「桃」「が」「川」「を」「流れる」が単語です。

「大きな」と「流れる」の文節は、一つの単語からできており、それぞれまとまった意味をもっています。

「桃が」と「川を」の文節は、「桃」や「川」の単語に意味があり、「が」や「を」は、それらの単語の下に付いて文節を作っています。

自立語と付属語とは

「大きな」「流れる」のように、単独で文節を作ることができる単語、また、「桃」「川」のように、文節の初めにくる単語を、**自立語**といいます。自立語は一文節に必ず一つあります。

「が」「を」のように、単独では文節を作ることができず、常に自立語の後に付いて、自立語と一緒に文節を作る単語を、**付属語**といいます。

次の文を自立語と付属語に分けてみましょう。

家の庭に大きな梅の木があるそうだ。

① まず、文節に区切る。

家の 庭に 大きな 梅の 木が あるそうだ。

② 各文節の中で、それだけで意味のわかる単語(自立語)を抜き出す。

家の 庭に 大きな 梅の 木が あるそうだ。
「家」「庭」「大きな」「梅」「木」「ある」

自立語は一文節に必ず一つだけで、いつも文節の初めにあります。



③ それ以外の単語(付属語)を確認する。

家の 庭に 大きな 梅の 木が あるそうだ。
「の」「に」「が」「そうだ」

付属語は一文節にない場合も二つ以上ある場合もあります。

例 例 あり ました。(付属語がない場合)
あり ました。(付属語が二つ以上ある場合)

学習を確かめよう 

① 次の——線部の単語をA自立語とB付属語に区別し、記号で答えなさい。

- | | | | |
|-------------|-----|--------------|-----|
| (1) 駅に行く。 | () | (2) よく考える。 | () |
| (3) 私のだ。 | () | (4) 明日のことです。 | () |
| (5) 考えます。 | () | (6) この本か。 | () |
| (7) うん、いいよ。 | () | (8) 雪のようだ。 | () |

② 次の文について、あとの問いに答えなさい。

今年もここに大勢の観光客が訪れる。

- (1) 一線で文節に区切りなさい。
今年もここに大勢の観光客が訪れる。
- (2) 一線で単語に区切りなさい。
今年もここに大勢の観光客が訪れる。
- (3) 自立語を全て書き出しなさい。
()

③ 次の——線部の単語を自立語と付属語に分けて書きなさい。

(1) 庭に つばきの花が咲いている。

自 ()
付 ()

(2) 水そうの中から金魚だけを取り出した。

自 ()
付 ()

④ 次の文の全ての自立語に——線を引きなさい。

- (1) 今日 僕たちの クラスに 転校生が 来る。
- (2) 作文の 提出日は 明日です。
- (3) この 島には 自然が たくさん ある。
- (4) 花の 香りが 部屋に 広がります。
- (5) わたがしのような 雲が 空に 浮かぶ。

⑤ 次の文には、() の数だけ付属語があります。付属語に——線を引きなさい。

- (1) 彼の 趣味は 読書だ。 ()
- (2) 種は 四月の 暖かい 日に まく。 ()
- (3) 北海道の 大地は 冬の 間、 かたく 凍る。 ()
- (4) 赤い 夕日が 西の 空に 沈んだ。 ()
- (5) モンゴルの 草原で キャンプを するそうだ。 ()

(二) 活用の有無

美しい 星 が 穏やかな 夜空 に 輝く。

右の七つの単語の中で、「美しい」「穏やかな」「輝く」は、後に続く単語によって形が変化します。

美しい
美し(く)ない
美し(かる)う
美し(かつ)た
美し(けれ)ば

穏やかなだ
穏やか(で)ない
穏やか(だろ)う
穏やか(だつ)た
穏やか(なら)ば

輝く
輝(か)ない
輝(こ)う
輝(い)た
輝(け)ば

一方、「星」「が」「夜空」「に」は、どんな単語が続いても単語の形は変化しません。

活用の有無とは

単語には、文の中で使われるとき、形が変わるものと変わらないものがあります。「美しい」「穏やかな」「輝く」のように、単語の形が変化することを、**活用(する)**といいます。一方、「星」「が」「夜空」「に」は、活用しない語です。

また、付属語にも活用するものがあります。

例 読み(ます)。
↓ 読み(まし)た。
↓ 読み(ませ)ん。

活用する自立語は、「動詞」「形容詞」「形容動詞」です。

活用する付属語は、「助動詞」です。34ページの「品詞分類表」を参考にしましょう。



学習を確かめよう

① 次の単語の中から活用するものを五つ選び、記号に○を付けなさい。

ア 食べる イ きれいだ ウ 縄跳び エ やさしい
オ 遊ぶ カ もっと キ そして ク 白い

② 次の——線部の自立語のうち、活用するものには○を、活用しないものには×を、右側に付けなさい。

(1) 朝食には、パンと卵とサラダを食べます。

(2) 母の明るく笑う声が部屋中にひびく。

(3) 犬を散歩に連れていくことが僕の仕事です。

③ 次の——線部の付属語から、活用するものを一つ抜き出して書きなさい。

(1) 明日は自転車で学校に行きます。

(2) 太陽が空をすべるように動く。

(3) 弟はボールを遠くまで投げられる。

二 品詞

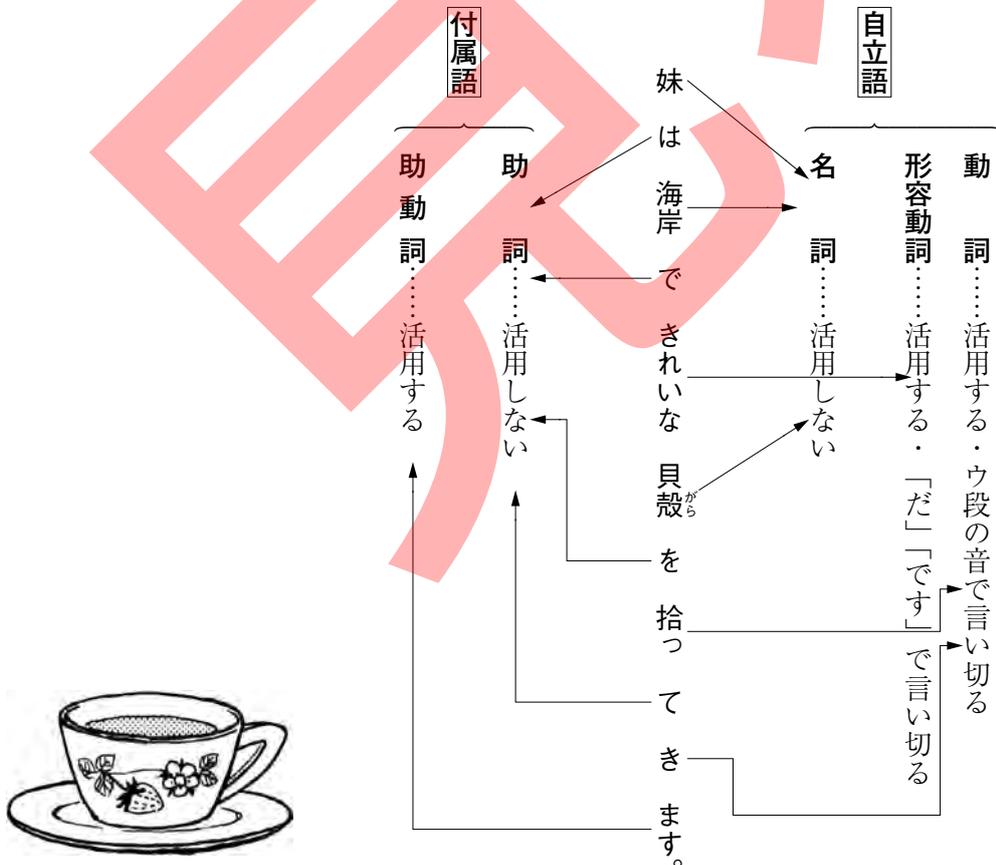
単語は、文法上の性質によって、いくつかの種類にまとめられます。文法上の性質には、次のようなものがあげられます。

- ・自立語か、付属語か。
- ・文中で語形が変化する（活用する）か、変化しない（活用しない）か。
- ・文中でどの文の成分（主語・述語・修飾語・接続語・独立語）になるか。
- ・体言（名詞）か、用言（動詞・形容詞・形容動詞）か。
- ・どんな形や働きをもつか。

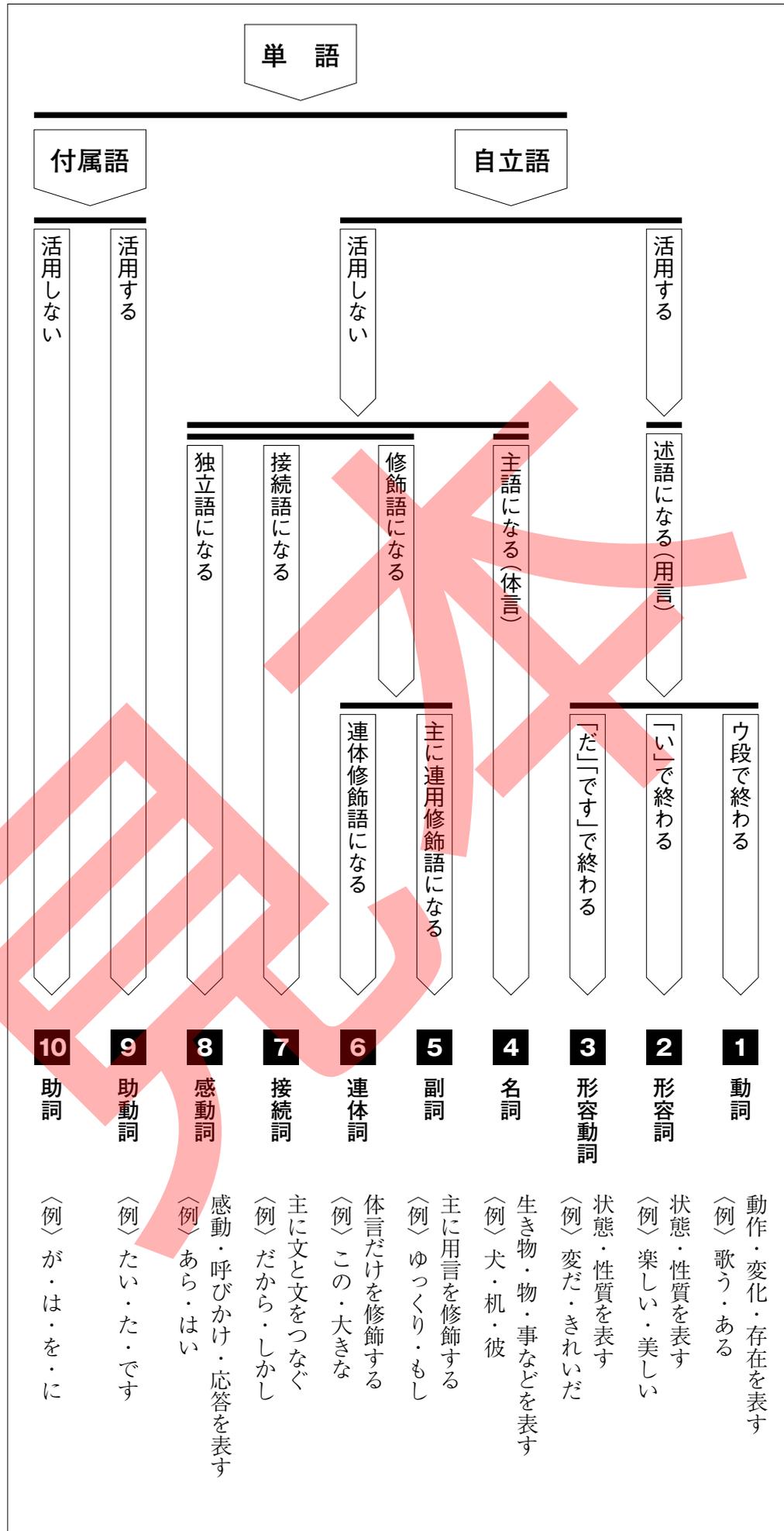
これらの文法上の性質によって分類したグループを、**品詞**といいます。単語は、十品詞に分類できます。詳しくは次のページを見ましょう。



例 妹は海岸できれいな貝殻がらを拾ってきます。



◎品詞分類表（口語）：文法上の性質によって単語を分類した表



品詞について詳しくは二年生で学習します。



学習を確かめよう 

① 次の単語の品詞名を書きなさい。

- (1) 走る・起きる・笑う・投げる
- (2) 赤い・明るい・小さい・美しい
- (3) きれいだ・穏やかだ・静かだ・元気です
- (4) ノート・眼鏡・筆箱・自動車
- (5) はっきり・たぶん・もっと・ゆっくり
- (6) この・大きな・おかしな・たいした
- (7) そこで・しかし・また・つまり
- (8) もしもし・こんにちは・はい・ああ
- (9) は・が・も・から
- (10) れる・たい・です・ます

() () () () () () () () () ()

② 次の単語の中から、品詞が異なるもの一つずつ選んで書きなさい。

- (1) 新しい・新鮮だ・白い・悲しい () ()
- (2) けれど・だけど・しかも・にぎる () ()
- (3) 山道・あれ・その・天気 () ()
- (4) さようなら・はい・すばらしい・えいっ () ()

③ 次の——線部の単語の品詞名を右側に書きなさい。

- (1) 書くときは、ていねいな文字で書くことが大切です。
- (2) あの時計は、父からもらった僕の宝物です。
- (3) 目標をもって取り組むことが、大切だ。
- (4) 桜の花びらが、はらはらと舞い落ちる。
- (5) 彼女は元気があるので、健康だと思われる。



三 体言と用言

次の文から、それぞれ、主語と述語を見つけてみましょう。

妹が 笑う。
夕日は 美しい。
彼も 素直だ。

このとき、

主語	
妹が	夕日は
彼も	

述語	
笑う。	美しい。
	素直だ。

となります。

体言と用言とは

「妹」や「夕日」「彼」のように活用しない自立語のうち、「が・は・も」などを付けて、文の中で主語となる単語を**体言**といいます。品詞の中では、名詞がこれに当たります。

一方、「笑う」や「美しい」「素直だ」のように、活用し、単独で述語になることができる自立語を**用言**といいます。用言は、それだけで修飾語にもなれます。品詞では、動詞・形容詞・形容動詞の三種類があります。

次の文の中で、体言となる単語を見つけてみましょう。

部屋に 明るい 朝の 日ざしが 入る。

活用しない自立語のうち、「が・は・も」などを付けて主語になれるもの（＝名詞）は、全て体言ですので、この場合は、「部屋」「朝」「日ざし」の三つです。

体言と用言

体言

名詞

・体言は自立語で活用がなく、「が」「は」「も」などをともなって、**主語**になることができます。品詞では名詞がこれに当たります。

(花が) きれいに咲きました。(主語)

・用言は自立語で活用があり、単独で**述語・修飾語**になることがあります。

・動詞・形容詞・形容動詞の三つを合わせて用言といえます。

彼は、よく笑う。(述語)

彼は、よく笑う人だ。(修飾語)

庭の花が、とても美しい。(述語)

花が庭に美しく咲いた。(修飾語)

春の海は、穏やかだ。(述語)

穏やかな海に春を感じる。(修飾語)

用言

動詞

形容詞

形容動詞

学習を確かめよう 

① 次の単語の中から、体言を全て選び、記号に○を付けなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|-------|---|----|---|------|
| ア | はさみ | イ | 動く | ウ | 切手 | エ | 暗い |
| オ | 投げる | カ | おじさん | キ | 虹 | ク | 不思議だ |
| ケ | 日本 | コ | 一メートル | | | | |

② 次の単語の中から、用言を全て選び、記号に○を付けなさい。

- | | | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|-----|---|----|
| ア | 新しい | イ | 歩く | ウ | 自動車 | エ | 泳ぐ |
| オ | 冷蔵庫 | カ | 穏やかな | キ | 急ぐ | ク | 陸上 |

③ 次の文の中で、体言に全て——線を引きなさい。

- (1) 彼は クラス でもっとも 強い。
- (2) 白鳥 が 空 を 飛ん で いる。
- (3) 赤い 眼鏡 が 僕 の もの です。
- (4) あの 建物 が 私 の 家 です。
- (5) 祖母 の 家 には、大きな 時計 が あった。
- (6) 先生 が 詩集 を 出版さ れる。

④ 次の文の中で、用言に全て——線を引きなさい。

- (1) 弟 は 来年 から 小学校 に 通う。
- (2) 今日 の 海 は 穏やかだ。
- (3) この りんご は おいしい。
- (4) 七時 に 目覚まし時計 が 鳴る。
- (5) 浜辺 に にぎやかな 声 が あふれる。
- (6) 楽しい 時間 が 過ぎる。

⑤ 体言と用言になる品詞名をそれぞれ、体言は一つ、用言は三つ、漢字で書きなさい。

- | | | | | |
|----|---|---|--|---|
| 体言 | ： | (| |) |
| 用言 | ： | (| |) |

練習問題に取り組もう 

基本問題

① 次の——線部を自立語と付属語に分けて書きなさい。

(1) 図書館で本を探す。

自立語 (

付属語 (

(2) 私は駅まで走ります。

自立語 (

付属語 (

② 次の——線部の自立語のうち、活用するものを全て抜き出して書きなさい。

(1) 温かいスープを飲む。

(2) とても広い庭がある家だ。

(3) 祖父はのどかな田舎に住んでいる。

③ 次の——線部の単語は、あとのどの項目に当たりますか。記号で答えなさい。

ア 歩道橋に上つて美しい虹を見ました。

① 活用する自立語 (

② 活用しない自立語 (

③ 活用する付属語 (

④ 活用しない付属語 (

④ 次の——線部の自立語のうち、名詞(＝体言)を全て選んで、——線部の右に○を付けなさい。

これはプロでも難しい技だ。

⑤ 次の——線部の単語を例にならって、言い切りの形に直しなさい。

例 材料を集めようと思う。 ↓ 集める

(1) 空を飛ばない鳥。 ↓ (

(2) 新聞を読みました。 ↓ (

(3) 暑ければ、上着を脱げ。 ↓ (

(4) 彼は、元気な人だ。 ↓ (

① 次の文を例にならって単語に分けなさい。

例 私は—いつも—君—を—信じ—て—いる。

(1) あそこの家はよく日が当たる。

(2) それを聞くと私は幸せな気持ちになる。

(3) 僕は外へ出て調べ始めた。

② 次の文を例にならって単語に分けなさい。また、自立語か付属語に分けて書きなさい。

例 彼は—よく—歌—を—歌つ—て—いる。

自(彼) よく 歌 歌つ いる

付(は) を て

(1) 太陽が沈むと気温は下がる。

自()

付()

(2) 父はアメリカで仕事を始めた。

自()

付()

(3) 昨日の大雨で花壇は水浸しになってしまった。

自()

付()

③ 次の——線部の単語の品詞名をあとの□から選んで、記号で答えなさい。

(1) 父はとても親切だ。

(2) 理由はわかる。でも、だめだ。

(3) 食事を軽くとおこう。

(4) 用事をすっかり忘れていた。

(5) おはよう、杉山くん。

(6) このケーキは、とても甘い。

(7) 彼はあとから来るらしい。

(8) 海岸をぶらぶらと歩く。

(9) あの雲の上に行きたい。

(10) 妹がにこにこ笑った。

ア	動詞	イ	形容詞	ウ	形容動詞	エ	名詞
オ	副詞	カ	連体詞	キ	接続詞	ク	感動詞
ケ	助動詞	コ	助詞				

IV 文語のきまり

一 文語と口語の違い

次の文章は「竹取物語」の一節です。上の文章と下の文章は、全く同じ意味の文章です。しかし、言葉や仮名遣いが、少しずつ違います。どこがどのように違うか比べてみましょう。

文語文（古文）

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。

その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとつくしうてゐたり。

現代語訳（口語訳）

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつことといった。

（ある日のこと、その竹林の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思つて、近寄つて見ると、筒の中が光っている。それを見ると、（背丈）三寸ほどの人が、まことにかわいらしい様子で座っていた。

文語・口語とは

古い時代の言葉のことを古典語・文語といいます。それに対して、現在用いられている言葉を現代語・口語といいます。文語・古典語で書かれた文章は文語文（古文）といひます。

学習のねらい

- ◇ 文語とは、どのようなものか学ぶ
- ◇ 文語と口語は、どのようなところが違うのか学ぶ。
- ◇ 歴史的仮名遣いとは、どのようなものか学ぶ。

学習を確かめよう

① 上の「竹取物語」の文語文と現代語訳を比べて、次の文語に合う現代語訳を、例にならつて抜き出して書きなさい。

例 ありけり ↓ いた

(1) まじりて ↓ ()

(2) よろづの ↓ ()

(3) 使ひけり ↓ ()

(4) いひける ↓ ()

(5) もと光る ↓ ()

(6) あやしがりて ↓ ()

(7) いと ↓ ()

(8) うつくしうて ↓ ()

(9) あたり ↓ ()



歴史的仮名遣い・現代仮名遣いとは

古典の文章には、現代の文章と異なる仮名遣いが見られます。これは、平安時代の書き表し方を基準にしたもので、**歴史的仮名遣い**といえます。しかし、時が経つにつれて発音が変化し、書き表し方との間にずれが生じてきました。「いふ」と書いてあっても「イウ」と読んだり、「使ひけり」と書いてあっても「使イケリ」と読んでいたのです。このようなずれを解消するために、書き表し方を発音のしかたに合わせるようにしてできたものを「**現代仮名遣い**」といえます。

明治・大正のころ、話し言葉に基づく文章の形式である**口語体**が作られました。その後、昭和二十二年に現代仮名遣いが作られました。それ以前のもものは、**文語体**の文章であり、歴史的仮名遣いが用いられていました。古典の文章（文語文・古文）を口語に直して書かれたものを、**現代語訳**（口語訳）といえます。



② 次の「竹取物語」の文語文と現代語訳を比べて、あとの問いに答えなさい。

文語文

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金匱を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。

現代語訳

これこそ私が探し求めていた山だろうと思って、（うれしくはあるのですが）やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三日ばかり、（様子を）見て回っていますと、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、銀のお椀を持って、水をくんでいきます。これを見て、（私は）船から下りて、「この山の名は何と申すのか。」と尋ねました。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。



次の文語に合う現代語訳を文中から抜き出して書きなさい。

- ① さすがに ↓ ()
- ② おぼえて ↓ ()
- ③ 見歩くに ↓ ()
- ④ 天人のよそほひ ↓ ()
- ⑤ 何とか申す ↓ ()

二 文語の特徴

① 歴史的仮名遣いで書かれている。

例 いふもの(いふもの)

うつくしうて(うつくしゅうて)

よろづの(よろずの)

やうなし(ようなし)

まうできたるなり(もうできたるなり)

使ひけり(使いけり)

ゐたり(いたり)

こたふ(ことう)

たまふ(たもう)

② 口語で使わない言葉がある。

例 いと(とても) 使ひけり(使った)

光りたり(光っている)

③ 時を経て意味の変わった言葉がある。

例 あやしがりて(不思議に思つて)

うつくし (かわいらしい)

④ 言葉が省略されることが多い。

例 竹取の翁といふもの(が)ありけり。

もと(が・の) 光る竹

⑤ 主語・述語(主部・述部)の省略が多い。

例 「あやしがりて」の主部は「竹取の翁(といふもの)」。

⑥ 係り結びと呼ばれるきまりがある。

※係り結びとは、作者や登場人物の感動、疑問の気持ちをより強調する表現です。

例 もと光る竹なむ一筋ありける。(係り結び)

係り結びを作る言葉に「ぞ・なむ・やか・こそ」があります。



学習を確かめよう

次の「竹取物語」の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

文 語 文

大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がりたるほどに、立ち列ねたり^①。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり^②。

現 代 語 訳

大空から、人(A)、雲に乗って下りてきて、地面から五尺(約一・五メートル)ほどの高さあたりに立ち並んだ。これを見て、家の内や外にいる人たちの心は、何かこわいものにも襲われるようになり、戦おうとする気持ちもなくなってしまった。

(1) (A)に入る平仮名を次から選んで、記号で答えなさい。

アが イの ウを エと () ()

(2) 線①「立ち列ねたり」の主語を次から選んで、記号で答えなさい。

ア人 イ雲 ウ土 エ大空 () ()

(3) 線②「けり」に合う口語訳を、平仮名一字で書きなさい。

() ()

三 歴史的仮名遣い

文語は歴史的仮名遣いで書かれています。歴史的仮名遣いの読み方の原則をあげます。

① 「を・ゐ・ゑ」は「お・い・え」と読む。

例 をがむ ↓ おがむ まゐる ↓ まいる
くれなゐ ↓ くれなゐ こゑ ↓ こゑ

② 語頭以外に使われる「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、「わ・い・う・え・お」と読む。

例 つはもの ↓ つわもの 向かひて ↓ 向かいて
買ふ ↓ 買う かたへ ↓ かたえ かほ ↓ かお

③ 「au・iu・eu」は、「o・yu・yo」と読む。

例 更衣 (kai) ↓ こうい (koi)
幽霊 (iurei) ↓ ゆうれい (yurei)
苗字 (meuzi) ↓ みょうじ (myōji)

④ 語の途中に「ふ」のあるときは「う」にして、③の原則に従う。

例 尊く ↓ たうとく (tautoku) ↓ とうとく (tōtoku)
扇 ↓ あうぎ (augi) ↓ おうぎ (ōgi)

⑤ 「ぢ」・「づ」は、「じ」・「ず」と読む。

例 ぢめん (地面) ↓ じめん
しみづ (清水) ↓ しみず

⑥ 「くわ」・「ぐわ」は、「か」・「が」と読む。

例 くわし (菓子) ↓ かし
ぐわいこく (外国) ↓ がいこく

⑦ 「む」は「ん」と読むことがある。

例 なむ ↓ なん けむ ↓ けん らむ ↓ らん

学習を確かめよう

① 次の言葉を現代仮名遣いで書きなさい。

(1) をかし ↓ () (2) こゑ ↓ ()

(3) まどひて ↓ () (4) くれなゐ ↓ ()

(5) のたまふ ↓ () (6) はづれたる ↓ ()

(7) ぢめん ↓ () (8) くわかく(過客) ↓ ()

② 次の——線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直しなさい。

(1) ある人い^①はく、人は善^②き友にあ^③はんことをこ^④ひねがふべきなり。

(2) からき命^④まうけて、久しく病^⑤みるたりけり。

(3) 聞きしにも過^⑥ぎて、たふとくこそお^⑦はしけれ。

発展問題

① 次の「枕草子」の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

文語文

① うつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ、三つばかりなるちこの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。

現代語訳

(1) () もの。瓜に描い (2) () 幼い子の顔。雀の子が、ねずみの鳴き真似をすると、おどるようになつてくる。二、三歳ぐらいの幼い子が、急いではつてくる道に、(3) () 小さい塵があるのを目ざとく見つけて、(4) () (4) () 指につまんで、大人などに見せている様子は、() (3) () (1) ()。

——線①②③④の現代語訳に当たるものを一つずつ選び、記号に○を付けなさい。

- | | | |
|----------|----------|----------|
| ① うつくしき | ア 美しい | ア 美しい |
| イ 清く正しい | イ 清く正しい | イ 清く正しい |
| ウ かわいらしい | ウ かわいらしい | ウ かわいらしい |
| ② かきたる | ア してある | ア してある |
| イ してあろう | イ してあろう | イ してあろう |
| ウ してしまった | ウ してしまった | ウ してしまった |
| ③ をかしげなる | ア 不思議な | ア 不思議な |
| イ 笑ってしまふ | イ 笑ってしまふ | イ 笑ってしまふ |
| ウ 愛らしい | ウ 愛らしい | ウ 愛らしい |
| ④ 愛らしい | ア とても | ア とても |
| イ 糸のように | イ 糸のように | イ 糸のように |
| ウ ゆっくり | ウ ゆっくり | ウ ゆっくり |

② 次の「伊曾保物語」の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

文語文

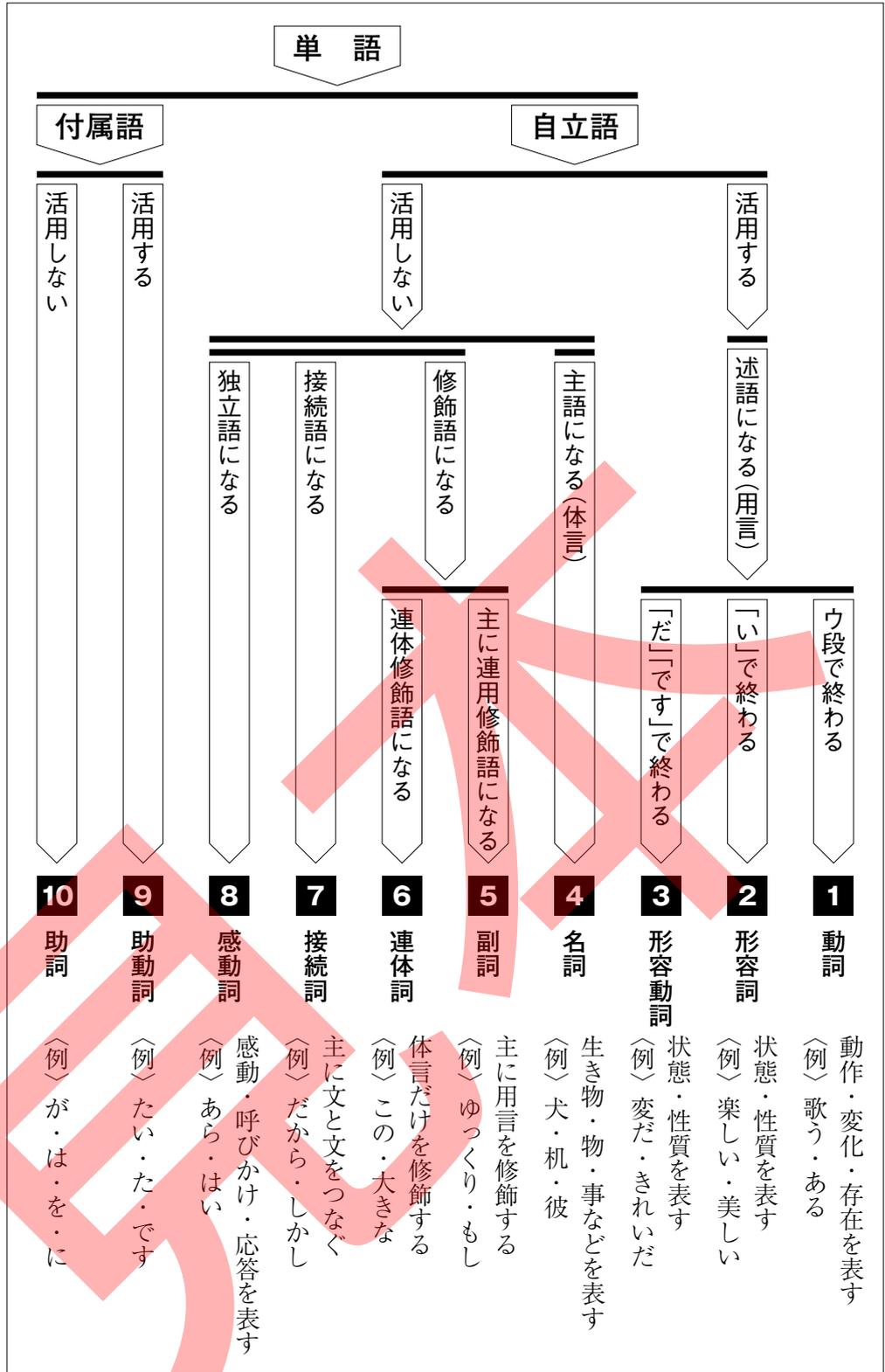
ある河のほとりに蟻遊ぶことありけり。にはかに水かさまさりきて、かの蟻をさそひ流る。浮きぬ沈みぬするところに、鳩、木末よりこれを見て、あはれなるありさまかな、と木末をちと食い切つて川の中におとしければ、蟻これに乗つてなぎさにあがりぬ。

現代語訳

ある川のはとりで、蟻が遊んでいました。急に水かさが増えてきて、(急な流れが) 蟻を飲み込んでしまいました。浮いたり沈んだりしていると、鳩が梢の上からこれを見て、かわいそうなようすだと(思つて) 木の枝の先を少し食いちぎつて川の中に落としてやったので、蟻はこれに乗つて岸に() A ()。

- (1) ——線①「さそひ流る」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。()
- (2) ——線②「食い切つて」の主語を、文語文の中から一字で抜き出して書きなさい。()
- (3) ——線③「これ」が指すものを、文語文の中から抜き出して書きなさい。()
- (4) (A) にはどんな言葉が入りますか。次から選んで、記号で答えなさい。()
- | | |
|-------------|--------------|
| ア 上がれませんでした | イ 上がりがたかったです |
| ウ 上がろうとしました | エ 上がりました |

◎品詞分類表（口語）
：文法上の性質によって単語を分類した表



困ったときには、
この表を思い出し
ましょう。



令和6年度版 ことばのきまり 中学1年

編集 「ことばのきまり」編集委員会
三河教育研究会

刊行 公益財団法人愛知教育文化振興会
〒444-0868 岡崎市明大寺町字馬場東170番地1
電話 (0564) 51-4819

印刷 あいち印刷株式会社

※無断で複写・複製することを禁じます。



1 年 組 番

氏名

令和

6

年度版

はとばのまはる

1



教師用

愛知教育文化振興会
三河教育研究会

もくじ

I 言葉の単位

一 文法とは 2

二 言葉の単位 3

(一) 文章・談話 3

(二) 段落 4

(三) 文 6

(四) 文節 7

(五) 単語 9

II 文の組み立て

一 文節どうしの関係 13

(一) 主・述の関係 (主語・述語) 14

(二) 修飾・被修飾の関係 (修飾語) 16

(三) 接続の関係 (接続語) 18

(四) 独立の関係 (独立語) 19

二 連文節 22

(一) 並立の関係 23

(二) 補助の関係 24

三 文の組み立て 25

III 単語の分類

一 単語の分類 30

(一) 自立語と付属語 30

(二) 活用の有無 32

二 品詞 33

三 体言と用言 36

IV 文語のきまり

一 文語と口語の違い 40

二 文語の特徴 42

三 歴史的仮名遣い 43

「ことばのきまり」の特色と使い方

「ことばのきまり」は、授業や教科書に合わせて、自主的に学習を進めることができるように編集してあります。この本のしくみと使い方を説明しますので、よく読んで学習を進めていきましょう。

一 この本のしくみ

「ことばのきまり」は、およそ次のように構成されています。

(一) 例を示して説明するところ

・ 例文を示して説明します。

・ 必要に応じて、詳しく説明します。

(二) 学習を確かめよう

・ 解説を受けて、基本的な問題を解きます。

(三) 練習問題に取り組みよう

① 基本問題をさらに解き、学習の定着を図ります。

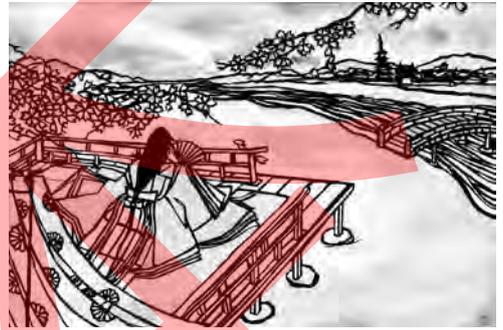
② 基本問題よりやや難しい発展問題を解きます。

※この構成は、学年や単元によって異なりますが、基本的な学習を終えて練習問題に進むことになっています。

二 登場人物のアドバイス

「ことばのきまり」には、次の二人の人物が登場します。それぞれのアドバイスをしたがって、自主的に学習を進めましょう。





『ことばのきまり1』を学ぶにあたって

— 確かな言葉の使い手になろう —

私たちの生活に、言葉は不可欠です。普段何気なく使っている言葉ですが、文法について理解することでわかりやすく思いを伝えることができます。それは、よりよい人間関係を育むことにつながります。『ことばのきまり1』では、主に次の四つの学習をします。

Iでは、言葉のまとまりを考える学習をします。

言葉は、意味や発音により、いくつかのまとまりに分けること

ができます。これら「言葉の単位」には、「文章・談話」「段落」

「文」「文節」「単語」があります。「文章・談話」の中を見ていくと、書き手が文章の内容のまとまりごとに区切った「段落」を見つけることができます。このような言葉のまとまりを意識することで、的確に文章を書いたり、読んだりすることができます。

IIでは、言葉と言葉の関係を考える学習をします。

「文節どうしの関係」「連文節」「文の組み立て」の学習を通して、複雑な文も、文の成分の組み合わせによって組み立てられ、関係し合っていることを確認することができます。

IIIでは、単語の分類について考える学習をします。

単語は、「単独で文節を作ることができるかどうか」「形はどのように変化するのか」「文の中でどのような成分になるのか」といった性質の違いによって分類ができます。

IVでは、古い時代の言葉である「文語」と、現代の言葉である「口語」について学習します。言葉は、時代や文化とともに変化します。文語の決まりを知ること、優れた古典の世界に触れることができるでしょう。

言葉を使うなかで自然と身につけてきた文法ですが、改めてその決まりを整理することで、みなさんが、より確かな言葉の使い手となっていくことを願っています。

I 言葉の単位

一 文法とは

私たちは、互いに自分の考えや気持ちを伝え合うため、または、事実を知らせるために言葉を使います。
そして、言葉を使うときには、その意味だけでなく、組み立て方、使い方の決まりをふまえて使っています。このような言葉に関する決まりを**文法**といいます。

おおまかに分けると、文法には次のようなものがあります。

- ① 言葉の区切り方
 - 私は一文を一書く。
 - × 私は作文を一書く。
- ② 言葉を並べる順序
 - 私は 作文 を 書く。
 - × 書く は 作文 私 を。
- ③ 言葉の形の変化
 - 私は 作文を 書いた。
 - × 私は 作文を 書きた。

よりわかりやすく正確に伝え合うために、文法を学んでいきましょう。

学習のねらい

- ◇ 文章や段落は、どのようなものか学ぶ。
- ◇ 文とは、どのような単位をいうのか学ぶ。
- ◇ 文節と単語とは、それぞれどのようなまとまりのことをいうのか学ぶ。

学習を確かめよう

言葉を並べる順序や、言葉の形が不自然なところを見つけ、正しく書き換えなさい。

- (1) 笑う が 彼女。
(彼女が 笑う。)
- (2) 本は この おもしろい。
(この 本は おもしろい。)
- (3) この 唐辛子は 辛く。
(この 唐辛子は 辛い。)
- (4) 花が きれいく 咲く。
(花が きれいに 咲く。)
- (5) 彼は 昨日 走ると。
(彼は 昨日 走った。)
- (6) 私は まったく 気に しません。
(私は まったく 気に しません。)

二 言葉の単位

(一) 文章・談話

① 文章

みなさんが作文を書こうとする場合について考えてみましょう。まず、「何について書こうかな。」と考えますね。次に、書く内容が決まったら、述べたいことを一文一文に書き表します。そして、自分の思いや気持ちを読む人に正しく伝わるように、作品を仕上げていきます。

文章とは

ある意図（読み手にぜひ感じてもらいたい思い・気持ち・訴え）のもとに書かれたものを**文章**といいます。また、音声によって表したときは、それを**談話**といいます。まとめてみると、**文章**とは、次のようなものと考えられます。

- ① 書き手の思い・気持ち・訴えが述べられている。
- ② いくつもの文が続いている。
- ③ 全体として一まとまりの内容をもっている。

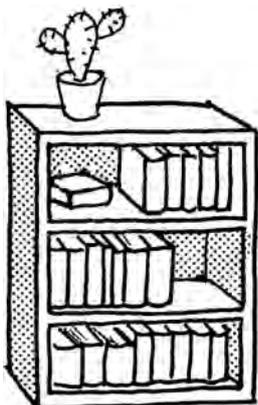
ですから、いくらたくさんさんの文が並んでいても、これらの条件を全て満たしていないものは、**文章**とはいえないのです。

講演や講義のように話されたものは、一つの**談話**ということができます。

② 文章の種類

文章は、次の表のように、大きく二つに分類されます。

項目	文章	
種類（ジャンル）	観察・記録・報告・説明・論説 など	詩歌・随筆・物語・小説・脚本 など
中心となる内容	要旨	主題
書き手	筆者など	作者など
	説明的文章	文学的文章



(二) 段落

① 段落

- ① その疑問に答えるために、ダイコンの芽であるカイワレダイコンを見ながら考えてみます。カイワレダイコンは、双葉と根、その間に伸びた胚軸とよばれる茎から成り立っています。根の部分には、種から長く伸びた主根と、主根から生えている細いひげのような側根があります。
- ② これに対して、私たちが食べるダイコンをよく見てみると、下のほうに細かい側根が付いていたり、側根の付いていた跡に穴が空いているのです。いっぽう、ダイコンの下のほうは主根が太ってできています。つまり、ダイコンの白い部分は、根と胚軸の二つの器官から成っているのです。
- ③ この二つの器官は、じつは味も違ってきます。なぜ、違っていているのでしょうか。
- ④ 胚軸の部分は水分が多く、甘みがあるのが特徴です。胚軸は、地下の根で吸収した水分を地上の葉などに送り、葉で作られた糖分などの栄養分を根に送る役割をしているからです。
- ⑤ いっぽう、根の部分は辛いのが特徴です。ダイコンは下にいくほど辛みが増していきます。ダイコンのいちばん上の部分と、いちばん下の部分を比較すると、下のほうが十倍も辛み成分が多いのです。ここには、植物の知恵ともいえる理由がかくされています。

(稲垣栄洋「ダイコンは大きな根?」)

段落とは

この文章の①～⑤のように、文章は、書き手の意図をより明確に伝えるために、いくつかに区切って書かれています。そのまとまった意味をもつ一つ一つの段落(形式段落)といえます。段落の初めは改行して、一字下げます。

② 段落のまとめ

いくつかの形式段落が集まって、大きなまとまり(意味段落)を作る場合があります。文章は、普通いくつかの段落が集まって、大きなまとまり(意味段落)となり、それらが、さらにいくつか集まって組み立てられています。各段落の要点をまとめてみるとわかります。

例えば、上の文章の①～⑤段落の要点をまとめると、次のようになります。()にあてはまる語句を上文中から抜き出しながら、まとまりを考えましょう。

- ① カイワレダイコンは双葉と(根)、(胚軸(茎))から成り立っている。
- ② ダイコンの白い部分は二つの(器官)から成っている。
- ③ なぜ器官が違うと(味)も違うのか。
- ④ (胚軸) の特徴。
- ⑤ (根) の特徴。

この五つの段落は、内容から考えると大きく二つのまとまりに分けることができます。つまり「器官の違い」について書いている①・②と、「器官の違いによる味の違い」について書いている③・④・⑤の二つに大きくまとめられるのです。

- ① 内容から考えてまとめた大きなまとまりのことを、**意味段落**といふことがあります。
- ② 大きなまとまりは、それぞれ働き(問題提起・答え/序論・本論・結論など)を果たしています。
- ③ 大きなまとまりに着目して文章を読むと、文章全体の内容や構成がつかみやすくなります。



学習を確かめよう

① 次の文章は、いくつかの形式段落からできていますか。漢数字で書きなやこ。

龍だ。体をあずけた棒を頼りに、しなやかに舞い上がり、棒のしなりとともに、足を天に突き刺し、体をぴんと張る。その瞬間、世界中の音も時も止まる。まさに龍が天を駆け上っていくようだ。長坂先輩が、市の総合体育大会で棒高跳びのバーを跳び越える姿を初めて見た僕は、体中に電気が走るのを感じた。

長坂先輩は、先生や父兄に、きちんとあいさつをする。荷物や靴が乱れていたなら、だれのものでも関係なくきちんと整頓する。自分の運動神経の良さうぬぼれず、真面目で自分に厳しい。とてもかなわない。先輩は僕の中でスーパーヒーローとなった。

八月三日、先輩たち三年生にとって最後の大会だ。この日はかりは、自己新記録三メートル二十をどうしても跳んでもらいたい。僕は、もう祈るしかなかった。

大会当日、補助員になった僕は、係の子が持ってきた記録用紙を別の紙に写したり、掲示板を持っていったりと、大忙しだった。仕事中、僕は何度も時計を見た。そのたびに二階の会議室から外を見る。落ち着かない僕の心の中にざわめきが走る。思い切って外に出た。

見えた。ハードル走の向こうの、走り幅跳びの向こう。走り高跳びのさらに向こう。大歓声の中、遠くに僕はまた、龍を見た。台風の風とともに堂々と舞い上がっていく。跳んだ。うれしさのあまり、僕は飛び上がった。

(生徒作品)

形式段落の数 (五)

② 次のそれぞれの文章を三つの段落に分けて、第二段落、第三段落の初めの三字を書きなさい。

① 現在、地球温暖化が深刻な問題となっています。十八世紀後半ごろからのめざましい産業の発展に伴い、石炭や石油が大量に消費されるようになりました。その結果、大気中の二酸化炭素の量が増え、このままいくと二十一世紀末の地球の平均気温は、現在より二度上がるといわれています。この先、地球温暖化を食い止めるためには、私たち一人一人が環境に配慮するような生活をするのが大切です。 unnecessary 物は買わない、物を大事に使うなど「もったいない」の精神が私たちの地球を救うことにつながるのです。

(編集委員による書き下ろし)

第二段落 (十八世)

第三段落 (この先)

② 辺りがすっかりやみに飲み込まれたころ、ほのかに光るあたりがあたりこちらでゆれていた。「蛍だ。」僕は思わず叫んだ。あれは二年前のことだ。久しぶりに故郷を訪れた僕は、かつての遊び場だった宇奈川が、あまりにもみじめに汚れているのにショックを受けた。宇奈川が泣いている。僕はそう感じた。それから数日後、僕は決意を胸に宇奈川の前に立った。ある作戦を思いついたのだ。この川の復活をかけた大プロジェクトを。

(編集委員による書き下ろし)

第二段落 (あれは)

第三段落 (それか)

(三) 文

私たちは、次の a、b、c のように言葉を使います。

- a 出来事や事柄を相手に伝えたり、尋ねたりします。
 - ・長野のおばさんが遊びに来るそうです。
 - ・あなたはどんな本を読みましたか。
- b 自分の気持ちや意志を伝えます。
 - ・あの時のあなたの親切がうれしかった。
 - ・青森まで行ったら、十和田湖まで足をのびたい。
- c 相手に誘いかけたり、命令したりします。
 - ・学校まで一緒に行こうよ。
 - ・図書館で調べなさい。

文とは

いろいろな出来事や事柄を、伝えたり、尋ねたり、行動を誘いかけたりする言葉のまとまりを、**文**といいます。
文の区切りは、文字で書く場合は「。」(句点)で示するのが普通です。
話すときは、そこで息を切って、少し休むことで表します。

学習を確かめよう

① 次のうち、文と呼べないものはどれですか。記号で答えなさい。

- ア 国語の授業は楽しい。
- イ おはよう。
- ウ 夏に学校へ音楽で生徒です。
- エ 春が来て、中学校の生徒になった。

言葉が連続しているだけでは「文」とはいえません。日本語の言葉の決まりにしたがって、書き手、または話し手の意志や伝えたいことが表現されていなければ「文」といえないのです。



(ウ)

② 次の文の切れ目となるところに、例にならって句点(。)を付けなさい。

例 山田さんが留守をしていたすると大原さんが来た

試験が始まった問題用紙を見たら、頭の中が真っ白になったんだこ
れはこんな問題は見ることがないそうだったのだ僕は、テスト範囲を聞
違えていたのだけれど、今さらあがいても仕方がない僕は、覚悟を決め
て鉛筆を強く握りしめた

(編集委員による書き下ろし)

(四) 文節

あの子どもは今日もここへ来た。

右の文を、声に出して読んでみましょう。短い文ですから、一息で読むことができます。

この文を、意味を壊さず、不自然にならないように、できるだけ多くの部分に区切って読んでみましょう。口に出して、意味がわかるように区切って読むと、次のようになります。

あの 子どもは 今日も ここへ 来た。

文節とは

発音や意味のうえで不自然にならないように、文をできるだけ短く区切ったまとまりを**文節**といいます。

このように考えると、文は全て一つ以上の文節からできています。ですから、文節は文を組み立てる単位であるといえます。

文節の区切りを見つけるためには、次のように「ね」「さ」などを
入れてみるといいでしょう。

あの 子どもは 今日も ここへ 来た。



次の二つの文を文節に区切ってみましょう。

a 赤い花がきれいに咲く。

b 赤い夕日が西の山に沈みます。

aは、「赤い 花が きれいに 咲く。」と区切ることができます。

bは、「赤い 夕日が 西の 山に 沈みます。」と区切ることができます。

bの文の「沈みます」の部分を「沈み—ます」とするのは誤りです。「ます」はそれだけでは使わない言葉です。だから、「沈み」と「ます」を切り離すと、不自然です。

その言葉だけで意味のわかる言葉か、それだけで使わない言葉か、考えて判断しましょう。



学習を確かめよう 

① 次の文の文節の区切り方で、正しいものを選んで記号で答えなさい。

(1) 私は急いで家に帰った。

ア 私は 急いで 家に帰った。

イ 私は 急いで 家に 帰った。

ウ 私は 急いで 家に 帰った。

(イ)

(2) あの空き地はもうなくなるといいう。

ア あの 空き地は もう なくなると いう。

イ あの 空き地は もうなくなると いう。

ウ あの空き地は もう なくなると いう。

(ア)

(3) そんなことで練習を休ませてはくれなかった。

ア そんなことで 練習を 休ませては くれなかった。

イ そんな ことで 練習を 休ませては くれな かった。

ウ そんな ことで 練習を 休ませては くれなかった。

(ウ)

(4) このことは何も彼にかぎったことではない。

ア この ことは 何も 彼に かがった ことでは ない。

イ この ことは 何も 彼に かがった ことではない。

ウ このことは 何も 彼に かがった ことではない。

(ア)

② 次の文を例にならって、下の()に示してある数の文節に区切りなさい。

例 花が ———— きれいに ———— 咲く。

(3)

(1) 白い霧が一面に広がります。

(4)

(2) 本番中におなか痛くなる。

(4)

(3) 大雨になって中止になる。

(4)

(4) さまざまな音色が聞こえてきます。

(4)

(5) 私の紙飛行機は、明るい太陽の光を受けて飛び続けた。

(7)

(6) 大きなビルの角を曲がって消えた。

(5)

(7) あの子はもどってきて、あとをつぐでしょう。

(6)

(8) いつも泣かないで二人で静かに遊んでいました。

(6)



多くの場合、「て」「で」の後で文節は切れます。(詳しくは24ページ参照)
走っている。 読んでみる。

(五) 単語

① 単語

冷たい 水が 谷を 流れる。

右の例文は、四つの文節からできています。これを、さらに細かく分けてみましょう。

冷たい 水が 谷を 流れる。

となりますね。

単語とは

文節をさらに細かく分け、それ以上分けると言葉としての意味がなくなるか、言葉としての役割を果たさなくなるところまで区切った言葉の最小単位を、**単語**といいます。

単語にはいくつかの種類があります。例文の単語を使って分けてみましょう。

- ① 「水・谷」……………ものの名前を表す単語。
- ② 「冷たい・流れる」…動作(変化)や様子を表す単語。
- ③ 「が・を」……………別の単語の下に付いて、文節を作る単語。

「が」「を」も重要な働きをしている単語です。



〔単語の区切り方〕

次の文を単語に区切ってみましょう。

私も明日の試合に出る。

- ① まず、文節に区切る。

私も ね 明日の ね 試合に ね 出る ね。

- ② 各文節の中で、それだけで意味のわかる単語を抜き出す。

私も 明日の 試合に 出る。
 「私」 「明日」 「試合」 「出る」

- ③ それ以外の単語を確認する。(上にくる単語に付いて文節を作るもの)

私も 明日の 試合に 出る。
 「も」 「の」 「に」

- ④ 全部抜き出したか確認する。

「私」「も」「明日」「の」「試合」「に」「出る」

② 複合語

二つ以上の単語が結び付き、新たな意味をもつようになったものを複合語といいます。複合語は全体で一つの単語です。一まとまりで一つの意味をもち、アクセントの位置も変わります。

例 春休み・国語係・夏期講習・走り抜く・逃げ出す・長引く



学習を確かめよう 

① 次の文の単語の区切り方で、正しいものを選んで記号で答えなさい。

(1) 種は四月の暖かい日にまく。

ア 種は 四月の 暖かい 日に まく。

イ 種は 四月の 暖かい日 に まく。

ウ 種は 四月の 暖かい日に まく。

(2) 彼はぜいたくなものをもっていた。

ア 彼は ぜいたくな もの を もって いた。

イ 彼は ぜいたくな もの を もって いた。

ウ 彼は ぜいたくな もの を もって いた。

③ 次の単語を、①「ものの名前を表す単語」②「動作(変化)や様子を表す単語」③「別の単語の下に付いて、文節を作る単語」に分けて書きなさい。

(1) 姉は優しい顔で手を振る。

① (姉 顔 手)

② (優しい 振る)

③ (は で を)

(2) 今日から部活動の練習が始まります。

① (今日 部活動 練習)

② (始まり)

③ (からの が ます)

(3) きれいな夕日を見たと見る。

① (夕日 兄)

② (きれいな 見る)

③ (をと)

② 次の文を例にならって、下の()の中に示してある数の単語に区切りなさい。

例 赤い 夕日が 西の 空に 沈む。

(1) 今年は 暑い 日が続く。

(2) 彼の 趣味は 読書だ。

(3) 先生が 何度も 繰り返します。

(4) みんなは 港で 船を 待った。

(5) 休日は 家で 漫画を 読んだ。

(8)

(6)

(6)

(8)

(8)

(8)



単語の区切り方
詳しい説明

練習問題に取り組もう 

基本問題

① 次の文章は、句点（。）を付けて文に区切ると、いくつの文からできていますか。漢数字で書きなさい。

私は、人間はできるだけ自動車や電気製品を使わない暮らしをすべきだと考えます。エネルギーや資源をこのまま使い続けると、汚染が進み、資源もなくなってしまう全くと使わないのは無理だと思えますが、多少不便になっても、できるだけ自然に近い生活にもどるほうがよいと思います。

(編集委員による書き下ろし)

文の数 (三)

② 次の文を例にならって () に示してある数の文節に区切りなさい。

例 僕は一水を一飲んだ。

(1) 私は木の枝をゆすりました。

(2) 今度は逆に、彼の動きに注目してみる。

(3) 前に住んでいたところのことは忘れてしまったなあ。

(3)

(4)

(6)

(7)

③ 次のそれぞれの文は、一で文節を区切ってありますが、区切られていないところが一か所あります。例のように一を付け加えて正しく区切りなさい。

例 こんな一ことは一初めてだ。

(1) 友子は一指を折って一数えた。

(2) あのころの一ことを一忘れない。

(3) 私は一あんなに一険しい顔を一見た一ことは一ありませんでした。

(4) まるで一夢のような話だ。

(5) 私には一困ったとき一友達に一救われた一経験が一あります。

(6) 森を一渡る一風に一春の訪れを一感じるので一あった。

(7) 小鳥が一飛んできて一木の一枝に一とまる。

④ 次の文を例にならって () に示してある数の単語に区切りなさい。

例 夕日が西の海に沈みます。

(1) 今日はとてものどかなよい天気です。

(2) 教室から大きな声がすると驚く。

(3) 雨の日は読書をする人が多い。

(8)

(7)

(8)

(10)

① 次のそれぞれの文を、筋の通ったまとまりのある文章にするにはどう並べたらよいですか。その順番を（ ）に数字で書きなさい。

- (1) ある日の夕方、行列のできているラーメン店の前を通った。
- (4) すると、目の前にとんでもない量の一杯が差し出された。
- (3) 店に入って、券売機でラーメン大盛りのチケットを購入した。
- (2) ちょうどお腹もすいていたので、その店で夕食をとることにした。
- (6) やはり、初めて訪れる店のときには、事前にリサーチしておくべきである。
- (5) 大半を食べきれずに、残すことになってしまった。

② 次の文章中の——線①と②の部分を文節に分けるといくつに分けられますか。また、——線③と④を単語に分けるといくつに分けられますか。それらの数を、漢数字で書きなさい。

① シジユウカラは、春のおとずれとともに繁殖期をむかえます。木のうろなどにこけを運んで巣を作り、毎朝一つずつ、合計六個から十三個ほどの卵を産みます。ひながかえると、つがいで協力して青虫などの餌を巣に運び、子育てをします。

私は二〇〇五年から毎年、長野県軽井沢町かろいざわまちのとある森に巣箱を掛けて、繁殖したシジユウカラの様子を観察してきました。二〇〇八年六月のある日、研究の転機がおとずれました。

(鈴木俊貴「言葉」をもつ鳥、シジユウカラ)

- ① (文節の数： 六)
- ② (文節の数： 七)
- ③ (単語の数： 八)
- ④ (単語の数： 七)

③ 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

実験開始から五分後、三つの紙コップに入っている水の温度を計ってみた。どれも六十度を超えていた。

十分後には、紙コップに水を四分の一入れたものと半分入れたものが沸騰した。このとき、水を全部入れたものの温度は八十六度だった。(①)水が少ないものの方が早く沸騰し、そのために紙コップが燃えてしまうということはなかった。十五分たった。水を全部入れたものはまだ沸騰しなかった。(②)温度は九十一度に達しており、もう無理かなと思った。(③)温度計の赤いところが上に動いた。温度が上がったのだ。(④)まだ、温度が上がるのなら、という気持ちで、沸騰するまで待つ気になった。

(生徒作品)

(1) この文章には、形式段落を分けなければならないところが一か所あります。その場所の初めの三字を書きなさい。 (十五分)

(2) この文章には、句点(。)を付けなければならないところが一か所あります。例のように文章中に書き込みなさい。

例 私 は、本 を 読 ん だ そ の 本 は と て も お も し ろ か っ た 。

(3) この文章では、次の文が抜けています。この文が入る場所として最も適切な場所を(①)～(④)の中から見つけ、番号で答えなさい。

火を消そうとしたそのときだった。 (③)



文節・単語
練習問題

Ⅱ 文の組み立て

一 文節どうしの関係

赤い 夕日が 西の 海に 沈みます。

右の文は、五つの文節からできています。それぞれの文節は、多くの場合、文の中で、ある文節と深いつながりをもっています。

a 夕日が——沈みます

「何が」「どうする」という関係になっています。

b 赤い——夕日が

「赤い」が「夕日」の色を詳しく説明しています。

c 西の——海に

「西の」が「海」の方角を詳しく説明しています。

d 海に——沈みます

「海に」が「沈みます」の場所を詳しく説明しています。

文節どうしの関係とは

aの「何が」「どうする」のような関係を(一)主・述の関係、b・c・dのように、ある文節が他の文節を詳しく説明しているものを(二)修飾・被修飾の関係といい、この他にも(三)接続の関係、(四)独立の関係があります。このような四つの関係を文節どうしの関係といいます。また、文を組み立てる部分となるとき、文節が果たす役割を、**文の成分**といいます。

学習のねらい

- ◇ 文節どうしの関係には、どのようなものがあるか学ぶ。
- ◇ 文はどのような成分で組み立てられているか学ぶ。

学習を確かめよう

次の——線の文節に係る文節はどれですか。例にならって「」を書きなさい。

例 車の窓を少し開けた。

文節どうしが結び付くとき、前にある文節は、後の文節に係るといい、後にくる文節は、前の文節を受けるといいます。

(1) 僕は階段を下りた。

(2) 涼しい風が庭から吹いた。

(3) 僕はよく川へ遊びに出かけました。

(4) 僕の父は会社へ小さな車で通勤している。

(5) その猫は突然公園に走り始めた。



(一) 主・述の関係 (主語・述語)

- a 犬が 走る。
- b 花が 美しい。
- c あれが 中学校だ。
- d 本が ある。

右の四つの文は、

四つの基本文型がありますね。



- a 「何が (犬が) どうする (走る)」
- b 「何が (花が) どんなだ (美しい)」
- c 「何が (あれが) 何だ (中学校だ)」
- d 「何が (本が) ある・いる、ない (ある)」

という組み立てになっています。みなさんが、日常生活で読んだり、書いたり、話したりする文はもっと複雑な形をしていることが多いのですが、大きく分類すれば、文はこの四つの基本的な型に分けられます。

主・述の関係とは

文の中で、「何が」「誰が」に当たる文節を**主語**といい、「どうする」「どんなだ」「何だ」「ある・いる」「ない」に当たる文節を**述語**といいます。そして、この二つの文節の関係を、**主・述の関係**といいます。

したがって、a～dの各文の主語・述語は次のようになります。

- a 犬が 走る。 (主語: 犬が, 述語: 走る。)
- b 花が 美しい。 (主語: 花が, 述語: 美しい。)
- c あれが 中学校だ。 (主語: あれが, 述語: 中学校だ。)
- d 本が ある。 (主語: 本が, 述語: ある。)

主語は「ーが」のほかいろいろな形をとります。主語には、「が、は、も」が付くと覚えておくくと便利です。

- ・ 山が 美しい。 ・ 山は 美しい。 ・ 山も 美しい。
- また、次のように、「が、は、も」にかわり、主語を強めるなど、主語にはほかの意味をそえる言葉が付くこともあります。
- ・ 山こそ 美しい。 ・ 山だって 美しい。 ・ 山さえ 美しい。

主語の省略、主語と述語の倒置とは

日本語では、どの文にも主語があるとは限りません。**主語の省略**された文もよく見かけます。また、主語と述語の順序が入れ替わった文もあります。これを、**倒置**といいます。

①主語の省略

僕の猫の名前は、タマといいます。(タマは)僕が幼稚園のときに生まれました。

「生まれました」の述語に対して主語を考えると、生まれたのはタマですから、主語は「僕が」ではなく、「タマは」になります。

②主語・述語の倒置

元気だね、君は。 なんだらう、この不気味な音は。

体言と用言 (詳しくは36ページ)

体言 主語になることができる**単語**

用言 それだけで述語となることができる**単語**

例 犬が 花が あれが 彼が 走る。 美しい。 静かだ。

学習を確かめよう 

③ 次の文で、主・述の関係を探し、例にならってそれぞれ主語に線、述語に線を引きなさい。

① 次の文はどんな組み立てになっていますか。あとの□から選んで、記号で答えなさい。(線が主語・ 線が述語)

- (1) 僕はきのう父とつりに出かけた。 (ア)
- (2) 白い雲がある。 (エ)
- (3) 青空がたいへんきれいだ。 (イ)
- (4) これはヒマワリの花だ。 (ウ)
- (5) 「まあ」と母は驚いて、私を見ました。 (ア)

ア	何が(は)	—	どうする	イ	何が(は)	—	どんなだ
ウ	何が(は)	—	何だ	エ	何が(は)	—	ある・いる、ない

② 次の文の文節どうしの関係が、主・述の関係になっているものに○、そうでないものに×を書きなさい。

- (1) 友が いる。 (○)
- (2) たくさんの 花だ。 (×)
- (3) 太陽は 昇る。 (○)

例 水銀灯が ともる。

- (1) 母さんが 顔を 出した。
- (2) みんなも 顔を 見合わせて 笑った。
- (3) あちらこちらに 花びらが 浮かぶ。
- (4) 私は ブランコを ゆすりました。
- (5) 明け方の 空気は ひんやりと 冷たい。
- (6) 君こそ 英雄の 名に ふさわしい。
- (7) ハアと、誰かが ため息を つきました。
- (8) おいしい、この ケーキは。

④ 次の文の体言には線を、用言には線を引きなさい。

- (1) 空は 広く 青い。
- (2) 会場が 明るく なる。
- (3) 教室に 黒板が ない。



まず、述語を探しましょう。述語はほとんど句点(。)のすぐ上の文節にあります。次に、主語を探しましょう。主語は「何が」「誰が」に当たる文節です。

(二) 修飾・被修飾の関係 (修飾語)

次の文に、さらに詳しく述べる言葉を付け加えてみましょう。

花が 咲いた。

※詳しく述べる言葉が書かれていれば
全て認める。

(どんな花が?)

()

花が 咲いた。

(どのくらい咲いた?)

花が ()

花が 咲いた。

(どこに咲いた?)

花が ()

花が 咲いた。

例えば、前の文でそれぞれ(美しい)(たくさん)(庭に)を入れたとしましょう。全てつなげてみると、こんな文になります。

(美しい) 花が (たくさん) (庭に) 咲いた。

「花が」と「咲いた」の関係は主・述の関係です。「美しい」の文節は「花が」を、「たくさん」「庭に」の文節は「咲いた」を、それぞれ詳しく説明しています。

修飾・被修飾の関係とは

一つの文節が後の文節に係って、その意味内容を詳しくする関係を修飾・被修飾の関係といいます。係る文節を修飾語、受ける文節を被修飾語といいます。

例文の場合は、次のようになります。

【修飾語】

【被修飾語】

・美しい → 花が
・たくさん → 咲いた
・庭に → 咲いた

次の文の修飾・被修飾の関係を考えてみましょう。

小さい きつねが うらの 山に たくさん います。

小さい (主語) 山に (述語)
きつねが います

うらの 山に

たくさん

修飾・被修飾の関係は、次のように四つあります。

- ① 小さい → きつねが
- ② うらの → 山に
- ③ 山に → います
- ④ たくさん → います

連用修飾語・連体修飾語

修飾語は修飾する文節によって、二種類に分かれます。

連用修飾語 用言を含む文節を修飾する文節。

連体修飾語 体言を含む文節を修飾する文節。

次の各文の……線の修飾語は次のように分類されます。

(例)

小説を 読む。(何を ↓ どうする)

明日 出発する。(いつ ↓ どうする)

公園で 遊ぶ。(どこで ↓ どうする)

ゆっくり 歩く。(どのように ↓ どうする)

とても 難しい。(どのくらい ↓ どんなど)

私の 家族。(誰の ↓ 何)

数学の 教科書。(何の ↓ 何)

連体修飾語

連用修飾語

学習を確かめよう 

① 次の文の~~~~線が修飾している文節を見つけて、例にならって、
——線を引きなさい。

例 美しい花が満開です。

- (1) 私は顔を上げました。
- (2) 祖母の顔はとてもおだやかだった。
- (3) 母さんが一度だけつぶやいた。
- (4) 僕の父は戦争に行っていました。
- (5) 一階まで下りて庭に出た。
- (6) 僕はまじまじと父を見つめた。
- (7) やがて汽車が動き出した。
- (8) 静かな部屋で本を読む。
- (9) 兄弟そろって母の上に顔を寄せる。



多くの場合、受ける文節は、係る文節より後にきます。

② 次の——線の文節に係る修飾語全てに、例にならって、~~~~線を引きなさい。

例 車はゆつくりと走りだした。

- (1) 大きな手でボールをつかむ。
 - (2) この部屋はとても明るい。
 - (3) 私はすぐに家に帰る。
 - (4) 真っ先に私が笑った。
 - (5) 私はドアをそっと閉めた。
 - (6) 青空にきらきらと機体が輝く。
 - (7) 一人のたくましい若者が山頂にいた。
- ③ 次の文の~~~~線が連用修飾語であれば「用」、連体修飾語であれば「体」を（ ）に書きなさい。

- (1) 石がころころと転がる。 (用)
- (2) 美しい風景が広がっている。 (体)
- (3) 今できることは今しよう。 (体)

修飾語は一つとは限りません。見つけるときは、主述の関係と区別して考えましょう。



(三) 接続の関係 (接続語)

- a 美しかった。それで、いつまでも見とれていた。
- b 美しいので、彼の撮った写真に見とれた。
- c 訪ねたが、今日も老人は留守だった。

aの「それで」は、前の文と後の文をつなぐ役割をもつ文節になっています。

bの「美しいので」や、cの「訪ねたが」は、下の文全体に係って理由や条件を表す文節になっています。

接続の関係とは

文と文、文節と文節をつなぐ働きをもつ文節を、**接続語**といいます。また、接続語がつなぐ文と文との関係、理由や条件などを示す接続語と後に続く文節との関係を、**接続の関係**といいます。

〈前後の文の関係を表す〉

- ・ 楽しかった。だから、また遊びたい。 (理由)
- ・ よい映画だ。しかし、ヒットしないだろう。 (逆接)

〈後の文節に対する理由や条件を表す〉

- ・ 眠かったので、休んでしまった。 (理由)
- ・ 寒ければ、コートを着なさい。 (条件)

学習を確かめよう

① 次の文の接続語に……線を引きなさい。

- (1) 安いので、あと 四つ ください。
- (2) 一生懸命 やった。けれども、うまく できない。
- (3) できるのに、彼は 遠慮して いる。

- (4) 窓を 開けた。すると、山が 見えた。

- (5) その 提案は 魅力的だ。しかし、僕は 断る。

② 次の文の接続語に……線を引きなさい。また、その語が、a「前後の文の関係を表す」のか、b「後の文節に対する理由や条件を表す」のか、記号で答えなさい。

- 例 雪が降った。だから、今日は行かない。 (a)

- (1) 私は、努力をした。しかし、駄目だった。 (a)

- (2) さびしかったので、友達にメールをした。 (b)

- (3) 怖ければ、このテレビを見ないほうがいいよ。 (b)

(四) 独立の関係 (独立語)

独立の関係とは

これまでに習った文節どうしの関係は、必ず他の部分と関係をもっていました。しかし、中には、他の文節と直接関係がなく、独立している文節があります。その文節を、**独立語**といいます。また、**独立語**と、それ以外の文節との関係を、**独立の関係**といいます。

次の……線の部分が独立語です。

a	まあ、なんてきれいなんでしょう。	(感動)
b	はい、承知しました。	(応答)
c	八月十一日、この日は「山の日」です。	(提示)
d	先生、この問題がよくわかりません。	(呼びかけ)
e	こんにちは、お元気ですか。	(挨拶)

学習を確かめよう 

次の文の独立語に……線を引きなさい。
また、それが表すものをあとの□から選んで、() に記号で答えなさい。

(1) おはようございます、いい 日になりましたね。 (オ)

(2) おや、もう 花が 咲いたよ。 (ア)

(3) いいえ、僕は そんな ことは して いません。 (イ)

(4) みなさん、すぐに 集まって ください。 (エ)

(5) 笑顔、それが 君の 長所だ。 (ウ)

(6) 裏切り、これほど いやな ものは ない。 (ウ)

(7) ああ、なんと 美しい 友情だろうか。 (ア)

ア	感動	イ	応答	ウ	提示
エ	呼びかけ	オ	挨拶		



独立語はほとんど文の初めにあり、「、(読点)」で区切られています。

基本問題

① 次の文の接続語に……線を引きなさい。

- (1) 冬が来た。しかし、寒くはなかった。
- (2) 低いから、周りがよく見えない。
- (3) 真つ暗だったので、恐ろしかった。
- (4) 真つ暗だった。だから、恐ろしかった。
- (5) 暖かければ、私も行きます。
- (6) 見ると、まだ外は暗かった。
- (7) 絵の具がよいか。あるいは、ペンがよいか。
- (8) 暗かったから、走ってきた。
- (9) 風邪をひいた。そこで、薬を飲んだ。
- (10) 明るいから、新聞がよく読める。



② 次の文の独立語に……線を引きなさい。

- (1) お母さん、早く出かけようよ。
- (2) うん、当たるとうれいな。
- (3) おや、いつからここにいたの。
- (4) 明日、それは僕の運命を決める大切な日だ。
- (5) もしもし、田中さんのお宅ですか。
- (6) 君たち、学校に何を持ってきているの。
- (7) 携帯電話、そんなものは必要ない。
- (8) はい、そのとおりです。
- (9) さあ、元気に始めよう。
- (10) 四月一日、この日は弟の誕生日だ。



① 次の文で、主語・述語を探し、例にならって、主語に——線、述語に——線を引きなさい。

まずは、述語から探しましょう。
それから主語を見つけてみましょう。



例 美しいちょうがが花から花へと飛ぶ。

- (1) 今日も少年は動物園の辺りを歩き回った。
- (2) このノートも貴重な資料です。
- (3) 彼こそ勇者の中の勇者だ。
- (4) 誰だって美しい夢を思い浮かべる。
- (5) きつと、このパンもおいしいだろう。
- (6) 一匹の子犬、それが弟の大切な宝物でした。
- (7) 富士山も、日本で有名な観光地の一つだ。
- (8) 雨だけでなく、風さえ一段と強まった。

② 次の——線の文節を修飾する全ての文節に~~~~線を引きなさい。

- (1) 祖母はゆっくりといすに座った。
- (2) 私たちは少しいたずらを試みた。
- (3) すぐに僕は箱を彼に渡した。
- (4) 林の中に紅葉した大きな木があります。
- (5) 朝から通学者で大きなバスもたいへん混む。

③ 次の(1)~(4)の「」線部の文節どうしの関係は何の関係ですか。あとの□の中から選んで、記号で答えなさい。

- (1) 暑かったので、着なかった。 (ウ)
- (2) いいえ、わかりません。 (エ)
- (3) 竹馬の友という言葉がある。 (ア)
- (4) 彼は、すてきな人だ。 (イ)

ア	主・述の関係	イ	修飾・被修飾の関係
ウ	接続の関係	エ	独立の関係

二 連文節

学習を確かめよう

次の——線部の文の成分は何ですか。あとの□から選んで、記号で答えなさい。

- | | | |
|-----|----------------------|-----|
| (1) | 彼は 素直で 明るい。 | (イ) |
| (2) | 私は 鳥を 大きな かごに 入れた。 | (ウ) |
| (3) | 妹の 育てた ひまわりが 咲いた。 | (ア) |
| (4) | 三班の 人、手を 挙げて ください。 | (オ) |
| (5) | 雨が やんだので、 体育大会を 行った。 | (エ) |

ア 主部 イ 述部 ウ 修飾部 エ 接続部 オ 独立部

連文節になるのは、次のように結び付きが強い文節どうしの関係の場合です。



a	主部	白い	花が	咲いた。
b	述部	白い	花が	咲いて いた。
c	修飾部	白い	花が	公園の 花壇に 咲いた。
d	接続部	暖かく	なって	きたので、
e	独立部	白い	チューリップ、それが	花壇に 咲いて いる 花です。

例文の「白い花が」「咲いていた」「公園の花壇に」「暖かくなってきたので」「白いチューリップ」は、一まとまりで一つの文の成分と考えます。

連文節とは

二つ以上の文節がまとまって、主語・述語・修飾語などと同じ働きをするものを、**連文節**といいます。連文節で成り立っている文の成分は、一文節で成り立っている文の成分とは区別し、その働きによって**主部・述部・修飾部・接続部・独立部**と呼びます。

(1)	主語	雨は	主・述の関係	滝が	主・述の関係	流れ落ちる	ように	修飾部(連文節)	降った。	述語
(2)	修飾部(連文節)	大きな	鳥が	高く	飛びます。	修飾部(連文節)	修飾部(連文節)	修飾部(連文節)	修飾部(連文節)	述語
(3)	主語	数学と	並立の関係	英語を	今日	家で	勉強した。	修飾部(連文節)	修飾部(連文節)	述語
(4)	主語	兄が	本を	読んで	いる。	補助の関係	いる。	修飾部(連文節)	述部(連文節)	述語

※修飾・被修飾の関係で連文節になるのは、多くの場合、修飾語が連体修飾語のときです。

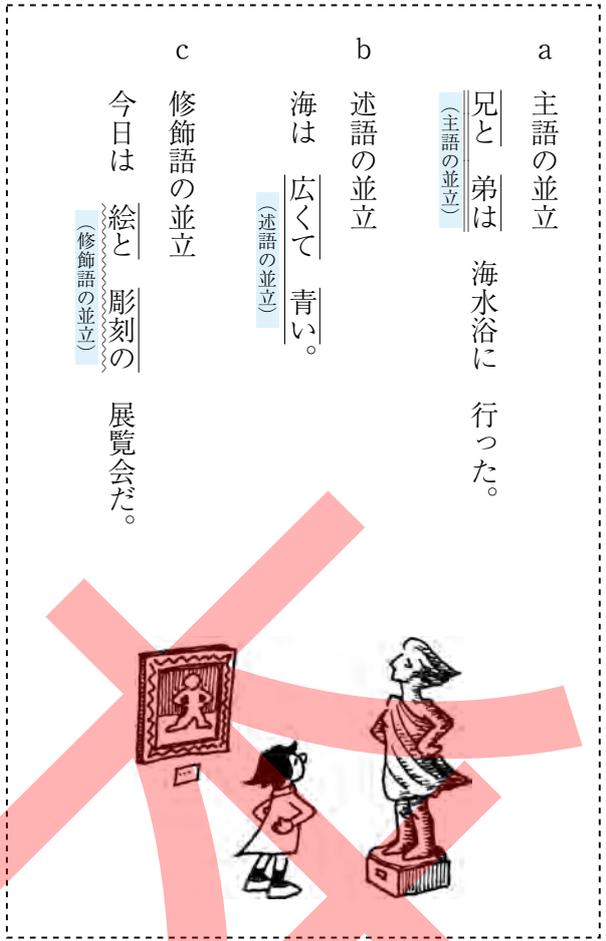
(3) 並立の関係と、(4) 補助の関係は、常に連文節になります。それでは、この二つの関係について学んでいきましょう。

(一) 並立の関係

a 主語の並立
兄と 弟は 海水浴に 行った。
(主語の並立)

b 述語の並立
海は 広くて 青い。
(述語の並立)

c 修飾語の並立
今日は 絵と 彫刻の 展覧会だ。
(修飾語の並立)



aの「兄と」と「弟は」は、ともに「行った」の主語です。bの「広くて」と「青い」は、ともに「海は」の述語です。cの「絵と」と「彫刻の」は、ともに「展覧会だ」に係る修飾語です。

並立の関係とは

二つ以上の文節が対等に並んでいる関係を並立の関係といい、一ままとまりで主語・述語・修飾語と同じ働きをします。

学習を確かめよう

次の文の中で並立の関係にある文節を探し、例にならって、——線を引きなさい。

- 例 赤い 大きな 花が 咲いた。
- この 町は 静かで 平和だ。
 - 君は 勉強も 運動も できる。
 - 彼は 私に 親切で 優しくかった。
 - にんじんと ピーマンは どうも 苦手だ。
 - 実際に 見たり 聞いたり した ことを 書く。
 - あそこを 歩いて いくのは 太郎か 次郎だ。
 - 道にも 畑にも 父の 姿は ありませんでした。
 - 僕の 時計は 時々 進んだり 遅れたり する。
 - 海が 荒れて 島も 水平線も カモメも 見る ことが できなかった。



言葉を入れ替えても意味が変わらないものを探しましょう。また、三文節以上の場合もあります。

(二) 補助の関係

- a 中野君が 運動場を 走って いる。
- b 桜は 美しい 花で ある。
- c 僕は 今 帰る ところだ。
- d 今日は 寒く ない。

aの文の「走って いる」の「いる」は、
父は 部屋に いる。

の「いる」とは違って、存在を表す意味が薄れ、「走る」という動作が続いていることを表しています。いわば、前の文節「走って」を補助する役目をしています。この「いる」は「走って」という文節との結び付きが強く、「走って いる」は、一つの文節のように取り扱うこともできます。
b・c・dの「花で ある」「帰る ところだ」「寒く ない」も、それぞれ一つの文節のように結び付きが強くなっています。

補助の関係とは

下の文節が上の文節の意味を補う文節どうしの関係を補助の関係といい、補助的に使われる下の文節を補助の文節といいます。

補助の文節は、本来の意味が薄れ、補助的な意味しかないので、普通、平仮名書きにします。

例 見る。
花を 見る。
道を 聞いて みる。(補助)



学習を確かめよう

次の文で補助の関係になっている文節に、例にならって、——線を引きなさい。

例 フカヒレを 食べて みる。

(1) 雲が たくさん 浮かんで いる。

(2) 注意点が 赤で 書いて ある。

(3) 君には もっと がんばって ほしい。

(4) おじいさんが 新聞を 読んで いらっしやる。

(5) 兄が すずめて くれた 本を 必死に 探した。

(6) もう すぐ 太平洋が 見えて くる。

(7) しまつて おいた お菓子を 机の 上に 置く。

(8) 夏が 終わつて しまつと 思うと とても 残念だ。

三 文の組み立て

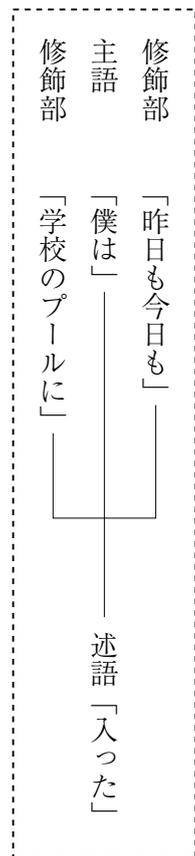
昨日も 今日も 僕は 学校の プールに 入った。

この文は、六つの文節から成り立っています。また「昨日も今日も」「学校のプールに」は、それぞれ連文節となっています。それぞれの部分の働きについて考えてみましょう。

昨日も今日も 僕は 学校のプールに 入った。

「昨日も今日も」「僕は」「学校のプールに」の三つの部分は、いずれも、それぞれ「入った」に係っていきます。

「入った」の文の成分は、述語になりますが、他の部分の文の成分は何になるでしょうか。



このように、複雑な文であっても、文の成分（主・述・修飾・接続・独立）の組み合わせで成り立っているのは同じです。文節がどのように組み立てられ、関係し合っているかを確認することで、よりの確に文の意味や内容を理解することができます。

学習を確かめよう

① 次の文のうち、主語には——線を、述語・述部には——線を引きなさい。

- (1) わあっと 歓声が あがる。
- (2) 私たちは 頂上 めざして 歩いた。
- (3) 小鳥が たくさん 飛んで いく。
- (4) 残念ながら 今月は 絵が 飾られて いなかった。
- (5) 朝から 雨が 滝のように 降り続いて いる。
- (6) ある日 私は 公園へ 行って みた。
- (7) 急に 嵐が 起こった。
- (8) 庭で 子犬が 若者たちと たわむれて いる。

補助の関係は連文節になります。



② 次の文の——線部は、それぞれどんな文の成分になっていますか。あの□から選んで、記号で答えなさい。

(1) 今朝 私は ガラスの コップを 割って しまった。
(ウ) (ア) (カ) (オ)

(2) ついに 水泳記録会の 日が やって きた。
(ウ) (エ) (オ)

(3) この 地方では 人々は 夏でも 上着を 着ている。
(カ) (ア) (ウ) (オ)

(4) 彼の 学校では 朝から 大きな 歌声が 響いている。
(カ) (ウ) (エ) (オ)

(5) 森林の 土には、 海の 生物を 育てる 大切な 役割が ある。
(カ) (エ) (イ)

ア 主語 イ 述語 ウ 修飾語 エ 主部 オ 述部 カ 修飾部

③ 次の文は、それぞれどんな文の成分からできていますか。文の成分を表す記号(線)をあとの□から選んで、その線を引きなさい。

例 兄も 一生懸命 走った。

(1) 彼の 顔は 興奮の ため 赤かった。

(2) 父親は 母親の 顔を じっと 見た。

(3) 駅と 公園は とても 近い。

(4) 白い 鳥が 美しい 湖から 大空へ 飛び立った。

(5) あそこに 彼が くらして いた 家がある。

※ 文の成分を表す記号
主語・主部 || 述語・述部
修飾語・修飾部 ~~~~~



③の詳しい説明

練習問題に取り組もう 

基本問題

① 次の二つの文を、意味を変えないで一つの文にしなさい。

(1) 月が出た。すると、辺りは明るくなった。

(例) 月が出ると、辺りは明るくなった。

(2) 話してみた。しかし、理解してくれなかった。

(例) 話してみたが、理解してくれなかった。

(3) 流れが静かだ。だから、怖さはない。

(例) 流れが静かだから、怖さはない。

② 次の文を、意味を変えないで二つの文にしなさい。

(1) 雨にぬれたから、風邪をひいた。

(例) 雨にぬれた。だから、風邪をひいた。

(2) ご飯を食べると、眠くなる。

(例) ご飯を食べると、眠くなる。

(3) 買い物してから、駅に行った。

(例) 買い物をした。それから、駅に行った。

③ 次の文は、それぞれどんな文の成分からできていますか。あとの□から選んで、記号で答えなさい。

(1) そして、ボールを また 元の場所に もどした。

(2) 犬がほえたから、近くの鳥は いつせいに 逃げていく。

(3) 兄と妹が 居間で いっしょに 勉強している。

(4) 山田さんと田中さん、ちよつと 来てください。

(5) 先頭の少年が 叫んだ。「さあ、行こう」。

(6) その人は、昔、オーケストラの指揮者だった。

(7) 天気がよかろうと悪かろうと、運動会は 決行されるだろう。

カ	ア
主語	主語
キ	イ
述部	述語
ク	ウ
修飾部	修飾語
ケ	エ
接続部	接続語
コ	オ
独立部	独立語



発展問題

1 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

地震列島^ア、僕たちの住む日本は、そう呼ばれている。いつ起こるかわからない、いつ起きても不思議はない。地震は、想像^イを絶するものだ。ふだん、僕たちは、頑丈^{がんじょう}な鉄筋コンクリート造りの校舎の中で生活している。よほどのことがない限り、倒壊することなどないだろうと思^ウっている。しかし、まだ記憶に新しい阪神大震災は、信じられないほどのすさまじい被害をもたらした。当時の設計者の計算では、十分に耐えられるはずのものが、^エもろくも崩れ去ってしまった。

(生徒作品)

(1) 線ア～エの文の成分を書きなさい。

- ア () **独立語** () イ () **述部** ()
 ウ () **主部** () エ () **修飾語** ()

(2) 線が係る文節を一文節で抜き出して書きなさい。

() **ないだろうと** ()

(3) 線の述部に対する主語・主部を文章中から抜き出して書きなさい。

() **僕たちは** ()

2 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

オーケストラで使われている楽器は、弦楽器、木管楽器、金管楽器と打楽器の仲間に分けられます。それらの楽器はそれぞれ特有の方法で音を出しています。

① ヴァイオリンとヴィオラとチェロとコントラバス、これらの弦楽器は弓で音を出します。弓には馬の尻尾^{しっぽ}の毛が張っており、それで弦をこすります。時にはギターのように弦を指ではじいて音を出すこともあります。

② 今では金属でできているものが多いのですが、フルートという楽器は、昔、木でできていたので木管楽器の仲間になります。フルートは「リップレート」と呼ばれる部分に唇を当てて息を吹き込んで音を出します。そのほかの木管楽器は「リード」を震わせることによって音を出します。クラリネットやオーボエ、ファゴットなどがそれにあたります。

金管楽器は、ホルンもトランペットもトロンボーンもチューバも大きさは違いますが、「マウスピース」というものに唇を当てて、自分の唇をブーツと震わせることで音を出します。

打楽器はたたいて音を出すものです。□ たたいて音の出るものならずべて打楽器の仲間ということになります。大太鼓^{おおたいこ}や小太鼓^{こたいこ}、トライアングルなどから木琴や鉄琴、そして「打楽器の王様」と呼ばれるティンパニという楽器もあります。(編集委員による書き下ろし)

(1) □に当てはまる接続語は何ですか。次から選んで、記号で答えなさい。

ア しかし () イ さて () ウ つまり () エ それとも () ウ ()

(2) 線①「ヴァイオリンと音を出します」を文の成分に分けると、いくつかの部分に分かれますか。漢数字で書きなさい。() **五** ()

(3) 線②「今では金属でできているものが多いのですが」の文の成分は何ですか。漢字で書きなさい。() **接続部** ()

3 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

わたしは、今年の夏、ボランティア活動に参加しました。それは、
初めての、しかも一回きりの体験でしたが、わたしの心に大きな変化
をもたらす出来事でした。
仕事は、市の福祉センターで、おむつたたみをすることです。長方
形の大きな布でできた老人用のおむつを、台の上で、決められた形
に折って いくのです。
わたしのしたことは、ほんのわずかなことです。(A)、続けて
いると、案外やりがいやよかったと思えることを見い出せるものだ
と気づきました。この体験は、わたしにとって、貴重なものでした。
わたしは、今後も自分にできるボランティア活動に参加したいと考
えています。

(生徒作品)



連文節
練習問題

(1) この文章はいくつの形式段落に分かれていますか。段落の数を漢数字で書きなさい。(四)

(2) この文章はいくつの文からできていますか。文の数を漢数字で書きなさい。(八)

(3) 線①「わたしは」に参加しました」はいくつの文節からできていますか。文節の数を漢数字で書きなさい。(五)

(4) 線②「台の上で」、③「折って いくのです」の文節どうしの関係を、次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア 主・述の関係 イ 修飾・被修飾の関係 ② (イ)
ウ 並立の関係 エ 補助の関係 ③ (エ)

(5) (A) にはどんな接続語が入りますか。次から選んで、記号で答えなさい。

- ア そして イ また ウ つまり エ でも (エ)

(6) 線④「案外」ものだと」、⑤「貴重なものでした」の文の成分を、次から一つずつ選んで、記号で答えなさい。

- ア 主部 イ 述部 ウ 修飾部 ④ (ウ)
エ 独立部 オ 接続部 ⑤ (イ)

(7) 線⑥「今後も」はどの言葉に係っていますか。係っている言葉を一文節で抜き出して書きなさい。(参加したい)

Ⅲ 単語の分類

学習のねらい

- ◇ 「単語」にはどのような種類があるか学ぶ。
- ◇ 「品詞」にはそれぞれどのような性質や働きがあるか学ぶ。

一 単語の分類

(一) 自立語と付属語

大きな 桃が 川を 流れる。

右の例文は、四つの文節からできています。これをさらに細かく分けてみましょう。すると、

大きな 桃 が 川 を 流れる。

となります。「大きな」「桃」「が」「川」「を」「流れる」が単語です。

「大きな」と「流れる」の文節は、一つの単語からできており、それぞれまとまった意味をもっています。

「桃が」と「川を」の文節は、「桃」や「川」の単語に意味があり、「が」や「を」は、それらの単語の下に付いて文節を作っています。

自立語と付属語とは

「大きな」「流れる」のように、単独で文節を作ることができる単語、また、「桃」「川」のように、文節の初めにくる単語を、**自立語**といいます。自立語は一文節に必ず一つあります。

「が」「を」のように、単独では文節を作ることができず、常に自立語の後に付いて、自立語と一緒に文節を作る単語を、**付属語**といいます。

次の文を自立語と付属語に分けてみましょう。

家の庭に大きな梅の木があるそうだ。

① まず、文節に区切る。

家の 庭に 大きな 梅の 木が あるそうだ。

② 各文節の中で、それだけで意味のわかる単語(自立語)を抜き出す。

家の 庭に 大きな 梅の 木が あるそうだ。
「家」「庭」「大きな」「梅」「木」「ある」

自立語は一文節に必ず一つだけで、いつも文節の初めにあります。



③ それ以外の単語(付属語)を確認する。

家の 庭に 大きな 梅の 木が あるそうだ。
「の」「に」「が」「そうだ」

付属語は一文節にない場合も二つ以上ある場合もあります。

例 例 あり ました。(付属語がない場合)
あり ました。(付属語が二つ以上ある場合)

学習を確かめよう 

① 次の——線部の単語をA自立語とB付属語に区別し、記号で答えなさい。

- | | | | |
|-------------|-----|--------------|-----|
| (1) 駅に行く。 | () | (2) よく考える。 | () |
| (3) 私のだ。 | () | (4) 明日のことです。 | () |
| (5) 考えます。 | () | (6) この本か。 | () |
| (7) うん、いいよ。 | () | (8) 雪のようだ。 | () |

② 次の文について、あとの問いに答えなさい。

今年もここに大勢の観光客が訪れる。

- (1) 一線で文節に区切りなさい。
 今年もここに天勢の観光客が訪れる。
- (2) 一線で単語に区切りなさい。
 今年もここに天勢の観光客が訪れる。
- (3) 自立語を全て書き出しなさい。
 (今年 ここ) 大勢 観光客 訪れる

③ 次の——線部の単語を自立語と付属語に分けて書きなさい。

- (1) 庭に つばきの花が咲いている。
 自 (庭 つばき) 花 咲い いる
 付 (に の が て)
- (2) 水そうの中から金魚だけを取り出した。
 自 (水そう 中 金魚) 取り出し
 付 (の から だけ を た)

④ 次の文の全ての自立語に——線を引きなさい。

- (1) 今日 僕たちの クラスに 転校生が 来る。
- (2) 作文の 提出日は 明日です。
- (3) この 島には 自然が たくさん ある。
- (4) 花の 香りが 部屋に 広がります。
- (5) わたがしのような 雲が 空に 浮かぶ。

⑤ 次の文には、() の数だけ付属語があります。付属語に——線を引きなさい。

- (1) 彼の 趣味は 読書だ。
- (2) 種は 四月の 暖かい 日に まく。
- (3) 北海道の 大地は 冬の 間、 かくく 凍る。
- (4) 赤い 夕日が 西の 空に 沈んだ。
- (5) モンゴルの 草原で キャンプを するそうだ。

(二) 活用の有無

美しい 星 が 穏やかな 夜空 に 輝く。

右の七つの単語の中で、「美しい」「穏やかな」「輝く」は、後に続く単語によって形が変化します。

美しい
美し(く)ない
美し(かる)う
美し(かつ)た
美し(けれ)ば

穏やかなだ
穏やか(で)ない
穏やか(だろ)う
穏やか(だつ)た
穏やか(なら)ば

輝く
輝(か)ない
輝(こ)う
輝(い)た
輝(け)ば

一方、「星」「が」「夜空」「に」は、どんな単語が続いても単語の形は変化しません。

活用の有無とは

単語には、文の中で使われるとき、形が変わるものと変わらないものがあります。「美しい」「穏やかな」「輝く」のように、単語の形が変化することを、**活用(する)**といいます。一方、「星」「が」「夜空」「に」は、活用しない語です。

また、付属語にも活用するものがあります。

例 読み(ます)。 ↓ 読み(まし)た。 ↓ 読み(ませ)ん。

活用する自立語は、「動詞」「形容詞」「形容動詞」です。

活用する付属語は、「助動詞」です。34ページの「品詞分類表」を参考にしましょう。



学習を確かめよう

① 次の単語の中から活用するものを五つ選び、記号に○を付けなさい。

- ア 食べる イ きれいだ ウ 縄跳び エ やさしい
オ 遊ぶ カ もっと キ そして ク 白い

② 次の——線部の自立語のうち、活用するものには○を、活用しないものには×を、右側に付けなさい。

(1) 朝食には、パンと卵とサラダを食べます。

(2) 母の明るく笑う声が部屋中にひびく。

(3) 犬を散歩に連れていくことが僕の仕事です。

③ 次の——線部の付属語から、活用するものを一つ抜き出して書きなさい。

(1) 明日は自転車で学校に行きます。

(2) 太陽が空をすべるように動く。

(3) 弟はボールを遠くまで投げられる。

二 品詞

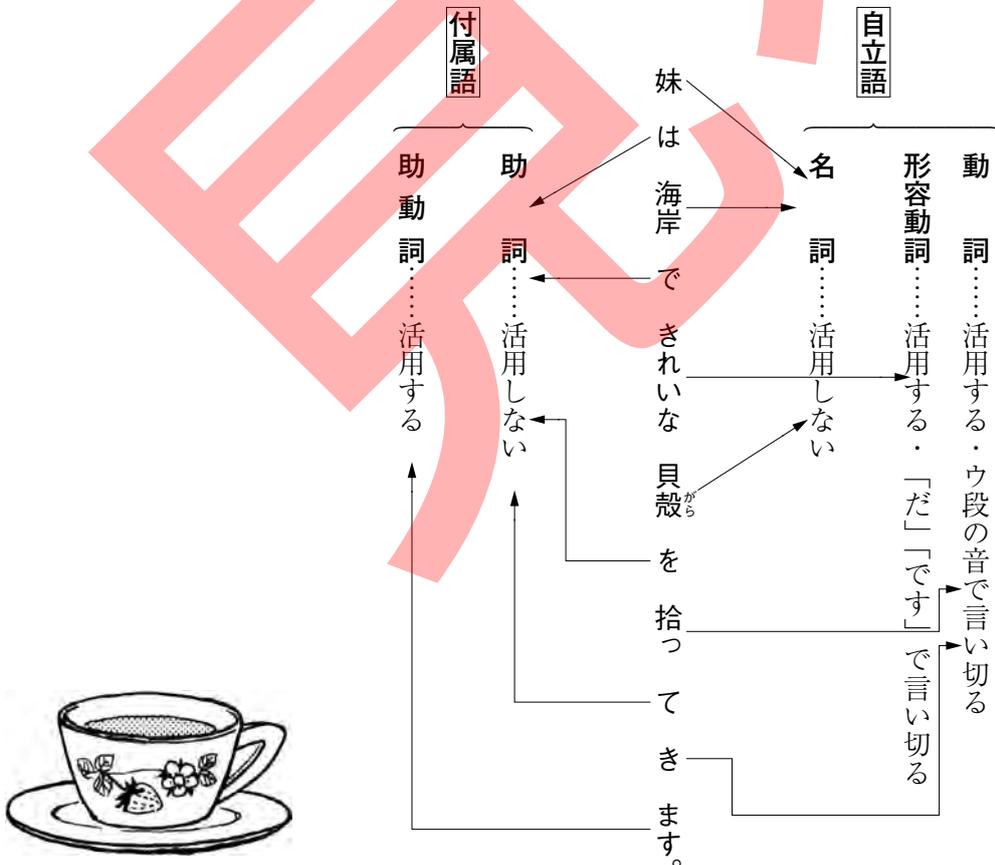
単語は、文法上の性質によって、いくつかの種類にまとめられます。文法上の性質には、次のようなものがあげられます。

- ・自立語か、付属語か。
- ・文中で語形が変化する（活用する）か、変化しない（活用しない）か。
- ・文中でどの文の成分（主語・述語・修飾語・接続語・独立語）になるか。
- ・体言（名詞）か、用言（動詞・形容詞・形容動詞）か。
- ・どんな形や働きをもつか。

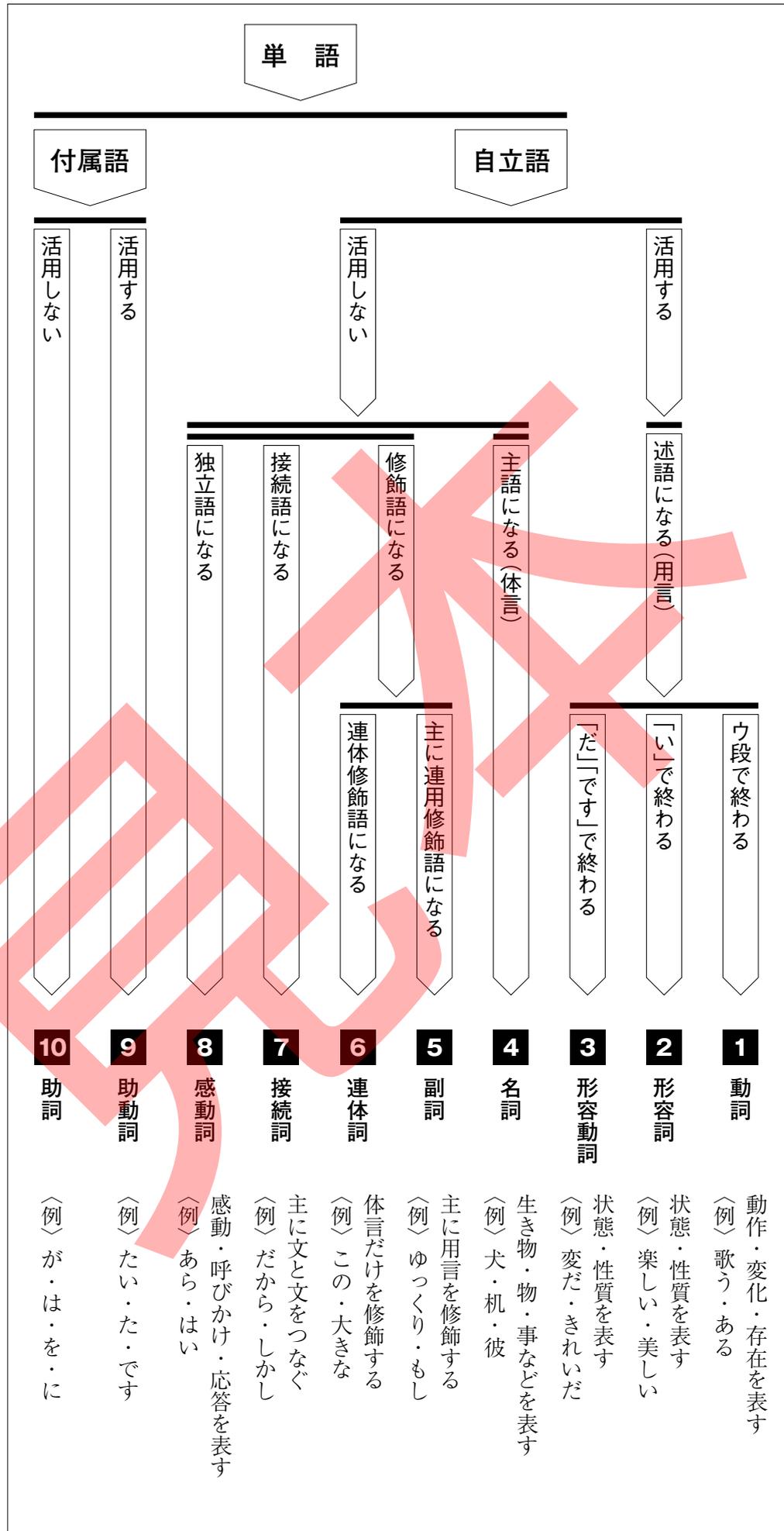
これらの文法上の性質によって分類したグループを、**品詞**といいます。単語は、十品詞に分類できます。詳しくは次のページを見ましょう。



例 妹は海岸できれいな貝殻がらを拾ってきます。



◎品詞分類表（口語）：文法上の性質によって単語を分類した表



品詞について詳しくは二年生で学習します。



学習を確かめよう 

① 次の単語の品詞名を書きなさい。

- (1) 走る・起きる・笑う・投げる (動詞)
- (2) 赤い・明るい・小さい・美しい (形容詞)
- (3) きれいだ・穏やかだ・静かだ・元気です (形容動詞)
- (4) ノート・眼鏡・筆箱・自動車 (名詞)
- (5) はっきり・たぶん・もっと・ゆっくり (副詞)
- (6) この・大きな・おかしな・たいした (連体詞)
- (7) そこで・しかし・また・つまり (接続詞)
- (8) もしもし・こんにちは・はい・ああ (感動詞)
- (9) は・が・も・から (助詞)
- (10) れる・たい・です・ます (助動詞)



② 次の単語の中から、品詞が異なるものをつつ選んで書きなさい。

- (1) 新しい・新鮮だ・白い・悲しい (新鮮だ)
- (2) けれど・だけど・しかも・にぎる (にぎる)
- (3) 山道・あれ・その・天気 (その)
- (4) さようなら・はい・すばらしい・えいっ (すばらしい)

③ 次の——線部の単語の品詞名を右側に書きなさい。

- (1) 書くときは、ていねいな文字で書くことが大切です。
 動詞 形容動詞
- (2) あの時計は、父からもらった僕の宝物です。
 連体詞 動詞 名詞
- (3) 目標をもって取り組むことが、大切だ。
 助詞 名詞
- (4) 桜の花びらが、はらはらと舞い落ちる。
 名詞 副詞
- (5) 彼女は元気があるので、健康だと思われる。
 名詞 形容動詞

三 体言と用言

次の文から、それぞれ、主語と述語を見つけてみましょう。

妹が 笑う。
夕日は 美しい。
彼も 素直だ。

このとき、

主語	
妹	夕日は
彼も	

述語	
笑う。	美しい。
	素直だ。

となります。

体言と用言とは

「妹」や「夕日」「彼」のように活用しない自立語のうち、「が・は・も」などを付けて、文の中で主語となる単語を**体言**といいます。品詞の中では、名詞がこれに当たります。
一方、「笑う」や「美しい」「素直だ」のように、活用し、単独で述語になることができる自立語を**用言**といいます。用言は、それだけで修飾語にもなれます。品詞では、動詞・形容詞・形容動詞の三種類があります。

次の文の中で、体言となる単語を見つけてみましょう。

部屋に 明るい 朝の 日ざしが 入る。

活用しない自立語のうち、「が・は・も」などを付けて主語になれるもの（＝名詞）は、全て体言ですので、この場合は、「部屋」「朝」「日ざし」の三つです。

体言と用言

体言

名詞

・体言は自立語で活用がなく、「が」「は」「も」などをともなって、**主語**になることができます。品詞では名詞がこれに当たります。

(花が) きれいに咲きました。(主語)

・用言は自立語で活用があり、単独で**述語・修飾語**になることがあります。

・動詞・形容詞・形容動詞の三つを合わせて用言といえます。

彼は、よく笑う。(述語)

彼は、よく笑う人だ。(修飾語)

庭の花が、とても美しい。(述語)

花が庭に美しく咲いた。(修飾語)

春の海は、穏やかだ。(述語)

穏やかな海に春を感じる。(修飾語)

用言

動詞

形容詞

形容動詞

練習問題に取り組もう 

基本問題

① 次の——線部を自立語と付属語に分けて書きなさい。

(1) 図書館 で 本 を 探す。

自立語 (図書館 本 探す)

付属語 (で を)

(2) 私 は 駅 まで 走り ます。

自立語 (私 駅 走り)

付属語 (は まで ます)

② 次の——線部の自立語のうち、活用するものを全て抜き出して書きなさい。

(1) 温かい スープ を 飲む。

(温かい 飲む)

(2) とても 広い 庭 が ある 家 だ。

(広い ある)

(3) 祖父 は のどかな 田舎 に 住ん で いる。

(のどかな 住ん いる)

③ 次の——線部の単語は、あとのどの項目に当たりますか。記号で答えなさい。

ア 歩道橋 に 上つ て 美しい 虹 を 見ました。

① 活用する自立語 (ウ、オ、ク)

② 活用しない自立語 (ア、カ)

③ 活用する付属語 (ケ、コ)

④ 活用しない付属語 (イ、エ、キ)

④ 次の——線部の自立語のうち、名詞(＝体言)を全て選んで、——線部の右に○を付けなさい。

これ は プロ で も 難しい 技 だ。

⑤ 次の——線部の単語を例にならって、言い切りの形に直しなさい。

例 材料 を 集め ようと思う。

↓ (集める)

(1) 空 を 飛ば ない鳥。

↓ (飛ぶ)

(2) 新聞 を 読み ました。

↓ (読む)

(3) 暑け れば、上着 を 脱げ。

↓ (暑い)

(4) 彼は、元気 な 人だ。

↓ (元気 だ)

発展問題

① 次の文を例にならって単語に分けなさい。

例 私はいつも一君を一信じ一て一いる。

(1) あそこの家はよく且が当たる。

(2) それを聞くと私は幸せな気持ちになる。

(3) 僕は外へ出て調べ始めた。

② 次の文を例にならって単語に分けなさい。また、自立語か付属語に分けて書きなさい。

例 彼一は一よく一歌一を一歌つ一て一いる。

自(彼 よく 歌 歌つ いる

付(は を て

(1) 太陽が沈むと気温は下がる。

自(太陽 沈む 気温 下がる

付(が と は

(2) 父はアメリカで仕事を始めた。

自(父 アメリカ 仕事 始め

付(は で を た

(3) 昨日の大雨で花壇は水浸しになってしまった。

自(昨日 大雨 花壇 水浸し なっ しまっ

付(の で は に て た

自立語か付属語に分

③ 次の——線部の単語の品詞名をあとの下から選んで、記号で答えなさい。

(1) 父はとても親切だ。(ウ)

(2) 理由はわかる。でも、だめた。(キ)

(3) 食事を軽くとっておこう。(エ)

(4) 用事をすっかり忘れていた。(オ)

(5) おはよう、杉山くん。(ク)

(6) このケーキは、とても甘い。(イ)

(7) 彼はあとから来るらしい。(ケ)

(8) 海岸をぶらぶらと歩く。(ア)

(9) あの雲の上に行きたい。(カ)

(10) 妹がにこにこ笑った。(コ)

ア	動詞	イ	形容詞	ウ	形容動詞	エ	名詞
オ	副詞	カ	連体詞	キ	接続詞	ク	感動詞
ケ	助動詞	コ	助詞				

IV 文語のきまり

一 文語と口語の違い

次の文章は「竹取物語」の一節です。上の文章と下の文章は、全く同じ意味の文章です。しかし、言葉や仮名遣いが、少しずつ違います。どこがどのように違うか比べてみましょう。

文語文（古文）

今は昔、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて竹を取りつつ、よろづのことに使ひけり。名をば、さぬきのみやつことなむいひける。
 その竹の中に、もと光る竹なむ一筋ありける。あやしがりて、寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人、いとつくしうてゐたり。

現代語訳（口語訳）

今ではもう昔のことだが、竹取の翁とよばれる人がいた。野や山に分け入って竹を取っては、いろいろな物を作るのに使っていた。名前を、さぬきのみやつことといった。
 （ある日のこと、その竹林の中に、根元の光る竹が一本あった。不思議に思つて、近寄つて見ると、筒の中が光っている。それを見ると、（背丈）三寸ほどの人が、まことにかわいらしい様子で座っていた。

文語・口語とは

古い時代の言葉のことを古典語・文語といいますが、それに対して、現在用いられている言葉を現代語・口語といいますが、文語・古典語で書かれた文章は文語文（古文）といっています。

学習のねらい

- ◇ 文語とは、どのようなものか学ぶ
- ◇ 文語と口語は、どのようなところが違うのか学ぶ。
- ◇ 歴史的仮名遣いとは、どのようなものか学ぶ。

学習を確かめよう

① 上の「竹取物語」の文語文と現代語訳を比べて、次の文語に合う現代語訳を、例にならつて抜き出して書きなさい。

例 ありけり ↓ いた

(1) まじりて ↓ 分け入って

(2) よろづの ↓ いろいろな

(3) 使ひけり ↓ 使っていた

(4) いひける ↓ いった

(5) もと光る ↓ 根元の光る

(6) あやしがりて ↓ 不思議に思つて

(7) いと ↓ まことに

(8) うつくしうて ↓ かわいらしい様子で

(9) あたり ↓ 座っていた



歴史的仮名遣い・現代仮名遣いとは

古典の文章には、現代の文章と異なる仮名遣いが見られます。これは、平安時代の書き表し方を基準にしたもので、**歴史的仮名遣い**といえます。しかし、時が経つにつれて発音が変化し、書き表し方との間にずれが生じてきました。「いふ」と書いてあっても「イウ」と読んだり、「使ひけり」と書いてあっても「使イケリ」と読んでいたのです。このようなずれを解消するために、書き表し方を発音のしかたに合わせるようにしてできたものを「**現代仮名遣い**」といえます。

明治・大正のころ、話し言葉に基づく文章の形式である**口語体**が作られました。その後、昭和二十二年に現代仮名遣いが作られました。それ以前のもものは、**文語体**の文章であり、歴史的仮名遣いが用いられていました。古典の文章（文語文・古文）を口語に直して書かれたものを、**現代語訳**（口語訳）といえます。



② 次の「竹取物語」の文語文と現代語訳を比べて、あとの問いに答えなさい。

文語文

これやわが求むる山ならむと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、二、三日ばかり、見歩くに、天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金匱を持ちて、水をくみ歩く。これを見て、船より下りて、「この山の名を何とか申す。」と問ふ。女、答へていはく、「これは、蓬萊の山なり。」と答ふ。

現代語訳

これこそ私が探し求めていた山だろうと思って、（うれしくはあるのですが）やはり恐ろしく思われて、山の周囲をこぎ回らせて、二、三日ばかり、（様子を）見て回っていますと、天人の服装をした女性が、山の中から出てきて、銀のお椀を持って、水をくんでいきます。これを見て、（私は）船から下りて、「この山の名は何と申すのか。」と尋ねました。女性は答えて、「これは、蓬萊の山です。」と言いました。



次の文語に合う現代語訳を文中から抜き出して書きなさい。

- ① さすがに ↓ () **やはり**
- ② おぼえて ↓ () **思われて**
- ③ 見歩くに ↓ () **(様子を) 見て回っていますと**
- ④ 天人のよそほひ ↓ () **天人の服装**
- ⑤ 何とか申す ↓ () **何と申すのか**

二 文語の特徴

① 歴史的仮名遣いで書かれている。

例 いふもの(いふもの)

うつくしうて(うつくしゅうて)

よろづの(よろずの)

やうなし(ようなし)

まうできたるなり(もうできたるなり)

使ひけり(使いけり)

ゐたり(いたり)

こたふ(ことう)

たまふ(たもう)

② 口語で使わない言葉がある。

例 いと(とても) 使ひけり(使った)

光りたり(光っている)

③ 時を経て意味の変わった言葉がある。

例 あやしがりて(不思議に思つて)

うつくし (かわいらしい)

④ 言葉が省略されることが多い。

例 竹取の翁といふもの(が)ありけり。

もと(が・の) 光る竹

⑤ 主語・述語(主部・述部)の省略が多い。

例 「あやしがりて」の主部は「竹取の翁(といふもの)」。

⑥ 係り結びと呼ばれるきまりがある。

※係り結びとは、作者や登場人物の感動、疑問の気持ちをより強調する表現です。

例 もと光る竹なむ一筋ありける。(係り結び)

係り結びを作る言葉に「ぞ・なむ・やか・こそ」があります。



学習を確かめよう

次の「竹取物語」の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

文語文

大空より、人、雲に乗りて下り来て、土より五尺ばかり上がりたるほどに、立ち列ねたり。これを見て、内外なる人の心ども、物におそはるやうにて、あひ戦はむ心もなかりけり。

現代語訳

大空から、人(A)、雲に乗って下りてきて、地面から五尺(約一・五メートル)ほどの高さあたりに立ち並んだ。これを見て、家の内や外にいる人たちの心は、何かこわいものにも襲われるようになり、戦おうとする気持ちもなくなりました。

(1) (A)に入る平仮名を次から選んで、記号で答えなさい。

アが イの ウを エと (ア)

(2) 線①「立ち列ねたり」の主語を次から選んで、記号で答えなさい。

ア人 イ雲 ウ土 エ大空 (ア)

(3) 線②「けり」に合う口語訳を、平仮名一字で書きなさい。

(た)

三 歴史的仮名遣い

文語は歴史的仮名遣いで書かれています。歴史的仮名遣いの読み方の原則をあげます。

① 「を・ゐ・ゑ」は「お・い・え」と読む。

例 をがむ ↓ おがむ まゐる ↓ まいる
くれなゐ ↓ くれなゐ こゑ ↓ こゑ

② 語頭以外に使われる「は・ひ・ふ・へ・ほ」は、「わ・い・う・え・お」と読む。

例 つはもの ↓ つわもの 向かひて ↓ 向かいて
買ふ ↓ 買う かたへ ↓ かたえ かほ ↓ かお

③ 「au・iu・eu」は、「o・yu・yo」と読む。

例 更衣 (kai) ↓ こうい (koi)
幽霊 (iurei) ↓ ゆうれい (yurei)
苗字 (meuzi) ↓ みょうじ (myōji)

④ 語の途中に「ふ」のあるときは「う」にして、③の原則に従う。

例 尊く ↓ たうとく (tautoku) ↓ とうとく (tōtoku)
扇 ↓ あうぎ (augi) ↓ おうぎ (ōgi)

⑤ 「ぢ」・「づ」は、「じ」・「ず」と読む。

例 ぢめん (地面) ↓ じめん
しみづ (清水) ↓ しみず

⑥ 「くわ」・「ぐわ」は、「か」・「が」と読む。

例 くわし (菓子) ↓ かし
ぐわいこく (外国) ↓ がいこく

⑦ 「む」は「ん」と読むことがある。

例 なむ ↓ なん けむ ↓ けん らむ ↓ らん

学習を確かめよう

① 次の言葉を現代仮名遣いで書きなさい。

(1) をかし ↓ (おかし) (2) こゑ ↓ (こえ)

(3) まどひて ↓ (まどいて) (4) くれなゐ ↓ (くれなゐ)

(5) のたまふ ↓ (のたもう) (6) はづれたる ↓ (はずれたる)

(7) ぢめん ↓ (じめん) (8) くわかく(過客) ↓ (かかく)

② 次の——線部の歴史的仮名遣いを現代仮名遣いに直しなさい。

(1) ある人いはく、人は善き友にあはんことをこひねがふべきなり。
① (いわく) ② (あわん) ③ (こひ)

(2) からき命まうけて、久しく病みるたりけり。
④ (もうけ) ⑤ (いたり)

(3) 聞きしにも過ぎて、たふとくこそおはしけれ。
⑥ (とうとく) ⑦ (おわし)

発展問題

① 次の「枕草子」の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

文語文

① うつくしきもの。瓜にかきたるちこの顔。雀の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ、三つばかりなるちこの、いそぎてはひ来る道に、いとちひさき塵のありけるを目ざとに見つけて、いとをかしげなる指にとらへて、大人などに見せたる、いとうつくし。

現代語訳

(1) () ① () もの。瓜に描い (2) () 幼い子の顔。雀の子が、ねずみの鳴き真似をすると、おどるようになつてくる。二、三歳ぐらいの幼い子が、急いではつてくる道に、(3) () 小さい塵があるのを目ざとく見つけて、(4) () (4) () 指につまんで、大人などに見せている様子は、() (3) () (1) () 。

——線①②③④の現代語訳に当たるものを一つずつ選び、記号に○を付けなさい。

- | | | | |
|----------|-------|---|--------|
| ① うつくしき | ア 美しい | ア | 美しい |
| イ 清く正しい | イ | イ | 清く正しい |
| ウ かわいらしい | ウ | ウ | かわいらしい |
| ② かきたる | ア | ア | 描く |
| イ へてあろう | イ | イ | へてあろう |
| ウ へてしまった | ウ | ウ | へてしまった |
| ③ 糸のように | ア | ア | 不思議な |
| イ 笑ってしまう | イ | イ | 笑ってしまう |
| ウ ゆっくり | ウ | ウ | 愛らしい |
| ④ をかしげなる | ア | ア | 不思議な |
| イ 愛らしい | イ | イ | 愛らしい |
| ウ 愛らしい | ウ | ウ | 愛らしい |

② 次の「伊曾保物語」の一節を読んで、あとの問いに答えなさい。

文語文

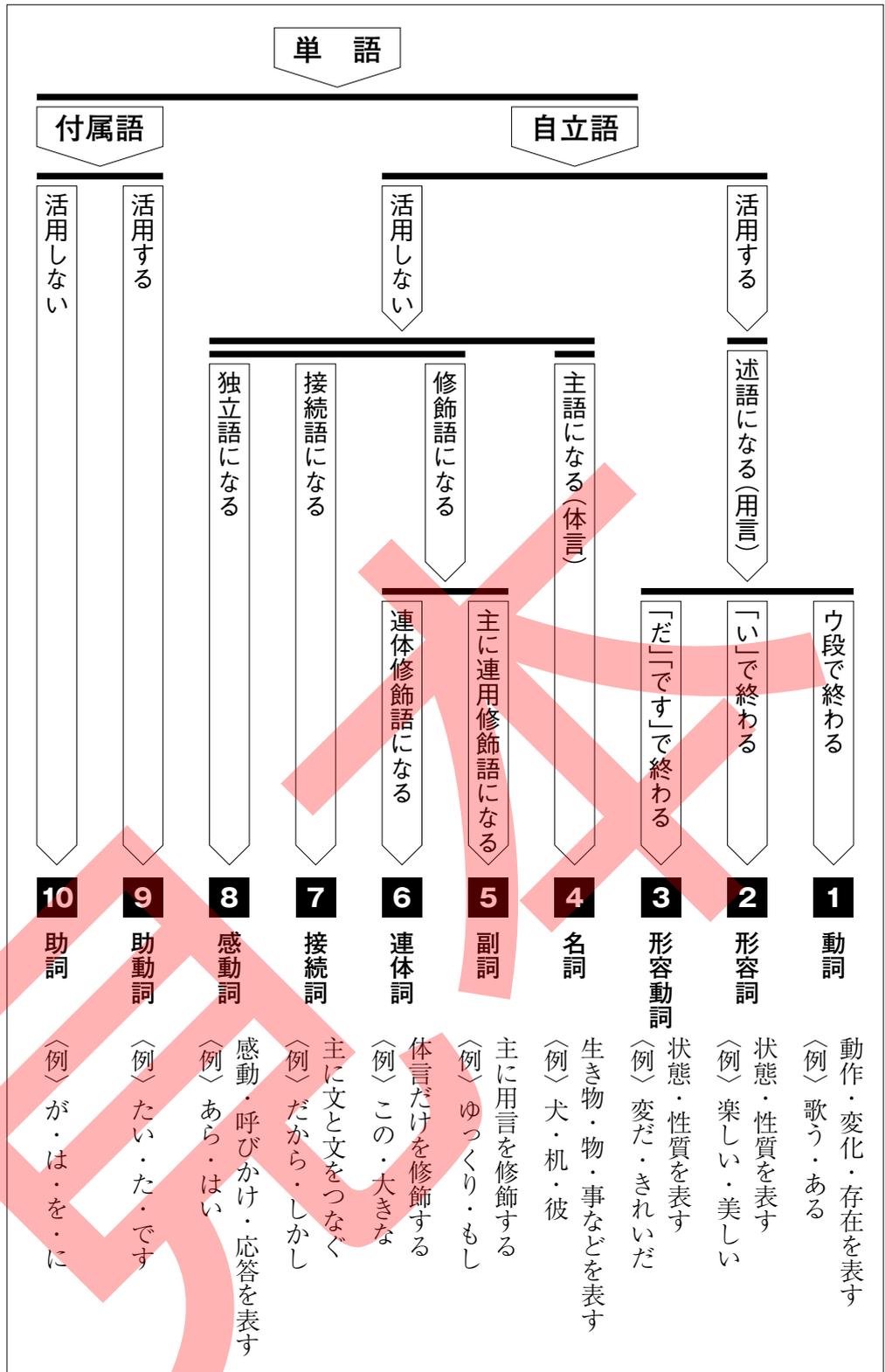
ある河のほとりに蟻遊ぶことありけり。にはかに水かさまさりきて、かの蟻をさそひ流る。浮きぬ沈みぬするところに、鳩、木末よりこれを見て、あはれなるありさまかな、と木末をちと食い切つて川の中におとしければ、蟻これに乗つてなぎさにあがりぬ。

現代語訳

ある川のはとりで、蟻が遊んでいました。急に水かさが増えてきて、(急な流れが) 蟻を飲み込んでしまいました。浮いたり沈んだりしていると、鳩が梢の上からこれを見て、かわいそうなようすだと(思つて) 木の枝の先を少し食いちぎつて川の中に落としてやったので、蟻はこれに乗つて岸に() A () 。

- (1) ——線①「さそひ流る」を現代仮名遣いに直し、すべて平仮名で書きなさい。() **さそひながる** ()
- (2) ——線②「食い切つて」の主語を、文語文の中から一字で抜き出して書きなさい。() **鳩** ()
- (3) ——線③「これ」が指すものを、文語文の中から抜き出して書きなさい。() **木末** ()
- (4) (A) にはどんな言葉が入りますか。次から選んで、記号で答えなさい。() **エ** ()
- ア 上がれませんでした イ 上がりがたかったです
ウ 上がろうとしました エ 上がりました

◎品詞分類表（口語）
：文法上の性質によって単語を分類した表



困ったときには、
この表を思い出し
ましょう。



令和6年度版 ことばのきまり 中学1年

編集 「ことばのきまり」編集委員会
三河教育研究会

刊行 公益財団法人愛知教育文化振興会
〒444-0868 岡崎市明大寺町字馬場東170番地1
電話 (0564) 51-4819

印刷 あいち印刷株式会社

※無断で複写・複製することを禁じます。



赤木 悠

1 年 組 番

氏名
